

靈鳥路空

いきっぱの空、  
淫行の夏

彼は殺意を覚えていた。季節に対してだ。

日の差さぬ土地にも、四季はある。特に地底の夏というのは、気温と湿度の両方が高く、極めて不快だ。いいかげんにしろよと、自然現象に毒づきたくなる。

もう今日はいっそ店を閉めてしまおうか。土蜘蛛の営む店に客などたいていして来ない。そんなやけっぱちの気分になるが、そうもいかなかった。稼がないと生きていけない。四季のめぐりに理不尽な怒りを覚えながら、彼は朝からただ番台に座り続けていた。存在するだけで汗が噴き出てくるような日であるから、一種の拷問にすら感じられる。全身すでにどろどろで、珠となった汗が額から目に次々と流れこんで鬱陶しい。中肉中背の中年に、この環境はなかなかこたえた。

「おじさん、お買い物に来たよ！」

ただ、ずっとそうしていた甲斐はあった。ようやく客が訪れたのだ。それも、この店いちばんの上得意が。見慣れたその顔に、いらっしやいと声をかける。颯められていた顔が笑みを形作る。腐つても商人、愛想を振りまくのが仕事だ。

「やあや、久しぶりじゃないか、空ちゃん」

軒先で迎える。訪ねてきたのは地獄鴉の少女だ。片手には買い物用だろうか手提げをぶら下げている。この店にはお使いでよく来るのだ。

気分が上向く。幼気な表情に笑顔を振りまく空は、金払いも良く愛嬌もある上客だ。現金なものだが彼も男で、可愛らしい娘が自分の店に来れば、当然、心も弾むのだ。いうなれば、彼女は、男一匹のむさ苦しい生活に添えられた一輪の花だった。

「久しぶり？ そうだっけ？」

「そうだよ。とはいえ、たかだか一週間だが」

彼同様、空も汗でずぶ濡れになっていた。風も吹かない地底では、どこに行こうが涼めるはずもないので、仕方のないことだ。

——ほう。

額や頬に浮かんだ珠が、きらきらと輝いている。ブラウスはじつとりと濡れ、肌にびつたりと張り付いている。その様を見、彼は感心せずにはいられなかった。

大したプロポーションだ。あどけない表情に似合わぬ、豊かで奔放な身体のラインが、くつきりと露わになっている。特に乳房などは大きく突き出しているぶん顕著で、白い下着や肌の色がうっすらとながら透けて見えるほどだ。思わず目尻が垂れ下がる。眼福とは、まさにこのこと。年甲斐もなく、股間の血行がぐんと良くなった。

こういう幸運があるのなら、クソほどの暑さも悪くはないな——口端が緩みかけた矢先、鈍く輝くぎよろりとした瞳と視線が合う。空自身はそれを八咫鳥と呼んでいた。

鳥といわれても、不自然な位置についた不気味な目玉にしか見えないのだが、それは彼女に力を与えているのだという。にわかには信じがたい話だった。

「おじさん？」

「あ、ああいや、こうも暑いと、頭がぼうつとしていかんね」

誤魔化す。察しの良い娘なら通じなかつただろうが、幸いにも彼女はそうでない。

「で、今日はどうしたんだい？」

「え？ ああ、えつと、なんだっけ、うーん？」

八百屋まで来ておいて、買い物以外のなんの用事があるだろう。けれども、これが彼女のいつも通りだった。元々金勘定などは苦手な方だったが、例の八咫鳥とやらを宿してからというもの、頭の弱さは輪をかけて酷くなっているようだった。

放つておいても埒があくまいと考え、助け舟を出す。

「君んとこのご主人様から、何か言われてないかね。それか、メモとか」

「さとり様から？ 何かあつたかな……あ、あつた。はいこれ」

彼女は手提げ袋をがさごそと漁り、手のひら大の紙切れを渡してきた。野菜の品目と必要な量が、つらつら書き並べられている。細かく綺麗に整っているが、神経質な字だ。地底ですら嫌われる妖怪が書いたのだと思うと、なんとなく警戒してしまう。

「なるほどね。じゃあ僕はこれを用意しておくから、空ちゃんは中で休むといい」

「いいの？」

「うん。暑いのにじつと立って待ってるのは嫌だろう？」

「そうだね。ありがとうおじさん。おじやまします」

そう言つて、空は彼の横を通りぬけ、店先を通つて居間へ向かつていった。彼女が通る際、少女らしい軽やかな香りがふわつ、と漂つた。肺いっぱい吸い込む。少女の香りというのは、滝のように汗をかいていたとしても芳しいものだ。

揺れる尻と太腿をスカート越しに眺めて見送ると、メモと一緒に渡された手提げに、指定の品を詰めていく。数こそ多いが、いつものことなので大した手間でもない。

終わると彼はそれを片手に居間へ向かつた。空は完全にくつろいでいた。仰向けに寝転がり、ブラウスのボタンを一つ余計に外し、襟元をばさばさ扇いで涼を得ている。そこから覗く鎖骨の窪みや胸の谷間に、自然、股間のもものが反応する。

「あ、おじさん、終わったの？ 早いね」

「いつもしてることだからね。それで空ちゃん、代金のことだけど」

「代金……うん、いつも通りの払い方がいいなあ。それでいい？」

いつも通りというのを、空はことさらゆつくりと発音した。心臓を甘く撫でられた

ように感じた。彼女に会話上の駆け引きができるとも思えなかったが、女というのは大なり小なり、男を惑わすものをもっているものだ。無自覚にそれが現れたのだろう。「ああ、もちろん。こつちもそれで払ってもらいたいと思つてたんだ。……じゃあ、早速、脱いでもらおうかな」

「え、今すぐ？ 汗かいちゃつたし、できれば水浴びさせてほしいんだけど」

首を振る。空は唇を尖らせるが、最終的には従つた。

地霊殿は上得意だ。しかしそれを除いても、空は彼にとつて特別な客だつた。彼女から現金を受け取つたことは、数度しかない。いつも、現物払いならぬ行為払いだ。金は、彼女の懐に消えているのだろう。あの主人が何も言わないのが不思議だが——なにせ、隠しごとは必ずバレる相手だ——黙認されているのだろう。

「汗臭いと思うんだけどなあ……」

言いつつも、空はブラウスのボタンに手を掛ける。ふつ、ふつと、一つずつ外れていく。彼はその様を——正確には、あらわになつていく肌理細かな肌や、幼さを残す顔立ちと裏腹な放埒な乳房、それを戒める黒いハーフカップブラ、きゆうとくびれた腰回りに、小さく窪む臍などを、じい、と見つめる。

「むふう……」

鼻息が荒くなっていた。股間だけやたらと血流が激しく、衣服に抑えられて痛い。続いて彼女は立ち上がり、スカートに手を掛ける。これもまたなんの躊躇いもなく、はらり、と取り払われた。布の落ちるぼさ、という小さな音とともに、生の下半身が彼の眼前にさらされる。

日頃の仕事で引き締められた肉感ある太腿や、子供らしさと大人らしさの間にあるような意匠の可愛げな下着。後ろに回り込むと、豊かながらもきゅつと上がった丸い尻肉に下着が食い込んだ様が、目を悦ばせた。

これぞまさに理想の肉体だ。自分のような男では、本来なら一生かけても拝むことかなわぬ肉体だ。そのことを、一目見ただけで直感的に理解させられる。

そんな最高のものを、一山いくらの野菜代と引き換えに眺めている。額面上は当然赤字になるが、得られるものはそれ以上。これぞ最高の取引、勝ち組というものだ。世間への優越感が性的興奮と合わさり、彼の瞳と海綿体を血走らせた。

「ふウツ、んふーツ、んふウウツ」

気づけば、空のもとに跪き、脚の間に顔を埋めるようにし、立ち上る甘くねっとりとした少女の香りを、肺いっぱい吸い込んでいた。大汗をかいているというのに、男のそれとは違って、いつまでも嗅いでいたくなる。脳がどっぷりと幸福感に浸る。

眼の前に、黒色の可愛らしい楽園がある。地底にありながら、天に昇った心地だ。

「おじさん、おじさん。なんかそれ、ヘンタイっぽいからやめてよ」

空は両肩を掴み、ぐいと引き離してきた。惜しまれたが、この後さらに素晴らしいものが見られるのだからと、己を落ち着かせる。

ところで、と彼は口を開く。

「あのさあ、駄目だよ空ちゃん。こないだ言ったじゃないか。支払いの最中は、僕のことをどう呼んでくれて言ったか、忘れたのかい？」

「え？ ……ああ、そういえばそんなの言ってたね、でも、パパ、って、おじさんは私のお父さんじゃないのに」

「そうだよ。でも僕はパパって呼んで欲しいんだ。どうかな」

「……まあ、いいけど」

ゴリ押しだ。それでも空は頷いた。

釈然としない表情だったが、彼女は続いて、背中へ手を回す。フツ、と、小さな、硬い音がした。ホックを外す、男なら誰でもワクワクしてしまう音が。

我儘に育ったたわわな乳房が、その戒めを失った。束縛から解放されたそれは、ふるん！ と、縮んでいた発条が戻るような勢いで震え、彼の目を楽しませる。



「ほおーう……」

知らず知らずのうちに、感嘆の溜息が零れる。釣り鐘を思わせる流れるような曲線を、快活な言動からは想像も付かないほどに白くなめらかな肌が象る。薄青色の静脈がうつつすらと透けて見える様は、吸い寄せられるような儚さがある。豊かなカーブの頂点、慎ましやかな尖りは、桜を思わせる淡い色でぼつちりと自己主張をしていた。

何度見ても飽きることにない芸術が、そこにはある。仮にこの乳だけを切り取って展示したとしても、一級の芸術品として一世を風靡するだろう。だがそれは、ひどく愚かなことだ。この双丘は、持ち主の肉体と見事に調和することで、本来以上の美を生み出している。それを一部だけ切り取るなど、美しさに対するテロリズムに等しい。女の乳には、男を否応なく惹きつける魔力が少なからず備わっているものだ。だが、空のそれは他とは比較にならないほど甚だしかった。揉みしだきたい、舐めしやぶりたいという本能的な欲求を、荒れ狂うギターのようにかき鳴らしてくる。一日中弄り回せたら、どれだけ幸せか。それは雄としての夢の一つといっても過言ではない。今すぐにでも空に飛びかかり、奔放極まりない肉球をうんざりするほど捏ね回してやりたい——彼の腕は半ば伸ばされていたが、しかし、途中で止まる。

「う……」

あの気味の悪い目玉と視線が合った。睨むわけでなく、ただ見つめてくるだけだが、何をしているのだお前は、と咎められたようで、いくらか冷静にならざるを得ない。彼の一人芝居を、空は胡乱な目で見ていた。

「おほん。……次は下を脱いでくれるかな」

幾分かかのぼつの悪さを覚えながら、それを誤魔化すように言う。まあいいけど、と、空は下着のサイドに指をかける——彼は引き止めた。

「ちよつと待った。そうだな、壁に手をつけて、尻をこつちに突き出して、その状態で脱いでみてくれないかな」

「え？ なにそれ、なんで？」

「まあまあ。何っていうか、ロマンだよ。頼むよ」

「いいけど、パパ本当変態みたい」

理解できない、と言外に言いつつ、空は近くの壁際で指示通りの姿勢をとる。彼はすぐそばで、突き出された臀部を目を見開いて見つめる。呆れるほどに完璧な肉体だ。ぶりん、という擬音はこれのために存在しているのではないかと思わされる理想的なカーブを、やや食い込んだ下着が包んでいる。柔肉は思わずむしやぶりつきたくなる。鉤爪状の曲線を描いて、太腿へと続く。一点の染みもなく、白い光を放つ、健康的で

肉感ある太腿へと。

手を伸ばしかける——ぐっとこらえた。皮膚が擦り切れるほど撫で回したいところだったが、そうなると一日中続けてしまいそうだ。代わりに、穴が空くほど見つめる。股座のものはこれ以上なく張り詰め、跳ね橋のように上向きとしていたが、衣服によつて抑えつけられていた。思い切りテントを張っている。

「そんなにじろじろ見ないでよ」

そんなことは到底できない相談だった。こんな素晴らしいものを目の前にして凝視しないでいられるなど、男以外のなにかだ。

「えつと、脱いでいい？」

「ああ、いいとも。脱いでくれ」

下着に指がかけられ、ゆっくり、ゆっくりと下ろされていく。むっちりとしつつも引き締まった若々しく弾力ある尻肉が、少しずつ少しずつ露わになる。それに比例し、彼の呼吸、心臓の鼓動も早くなっていく。女というものは誰でも、意識するしないに関わらず、少なからず男を誘う術をもつ。彼はまんまとその虜にされていたのだ。

やがて下着は、魅惑的な曲線の領域までずり降ろされる。薄灰色をした、密やかなすばまりが彼の視界に映し出される。

「おお……」

またも溜息が零れた。本来排泄口は不潔な場所のはずだが、空のそれはたまらなく魅力的に思えた。見られていることを意識したのか、そこは蠱惑的に収縮した。

「ひッ！　ち、ちよつと！　何してるの！」

「え、ああ、ごめんごめん、ついね」

空は腰から背中にかけてを震わせ、肺から抜けるような悲鳴をあげた。非難めいた視線を投げかけられたことで、窄められた菊門に自分の指が触れていたことに、彼はようやく気づいた。蝶が花に止まるような、無意識での行動だった。

「やめてよそんなとこ、ヤだからね」

強い口調で、空は明確に拒否した。そこまで言わなくても、と思ったが、口を噤む。機嫌を損ねられても困るからだ。

ぶりぶりと怒りながらも、空は脱衣を再開する。胸が高鳴った。彼女からは何度もこうした形で代金を支払ってもらっているが、女の象徴たる部位が露わになる瞬間のときめきは、何度味わつても色褪せることはないようだ。

尻から太腿にかかる曲線が二つに分岐していく。その谷間から、魅惑の園が覗く。またしても溜息が零れた。その穴は処女であるかのようにぴっちり閉じながらも、

雄を求めているかのように、女のフェロモンを振りまいていた。息を鼻から深く吸う。雌の香りが、汗の匂いと混ざりつつ肺へ流れ込んできた。生の少女の香り。そんなところらの薬屋で買えるものなどよりはるかに強力な精力剤だ。

低くしゃがみ、下から仰ぎ見る。陰の茂みは形こそよく整えられていたが、元々が毛深い方なのだろう、くろぐろとしていた。

「両脚、ちよつと開いてみて」

「こう?」

わずかに脚が開かれ、両太腿と陰部に挟まれた、魅惑の空白地帯が出来上がる。彼はすかさず、そこに頭を滑りこませた。

「え、ちよつと、ねえ、何してるの」

戸惑う声を見無視し、至近距離から甘酸っぱい香りを心から楽しむ。仰向けの、腹筋を途中で止めたような無理な姿勢だったが、そんなことは気にもならなかった。目の前の楽しみに比べればほんの些事だ。

味も気になるな。次に彼が抱いたのはそのような欲だった。満たせる欲求を、そのままにしておく手はない。舌を伸ばし、わずかにほころびつつある彼女の花に触れる。

「はひッ!」

突然の、そして予想外だったのだろう刺激に、空はまたも高い声をあげた。しかし、その意味するところは驚きだけではない。

割れ目に沿うように舌先を動かす。末端まで達すると、そのそばにある肉豆を、二、三度、つん、つんと舌端でつつく。

「あッ、あは、待つてパパ、待つてつてばあ」

口先では否定していたが、その声色は、菊穴に触れたときの硬いものとは全く違う、媚を含んだものになりつつあった。感じているのだ。つまり従う必要なし。聞く耳をもつことなく、裂け目へ舌を押し入れていく。

「はあ、あう、くううん」

あがるのは、甘く蕩けた女の声だ。舌をわずかでも動かせば、背を震わせよがつてみせる。待てと言われても無理だ。そんな反応をされて、やめられるはずがない。

空の中からとろみのある蜜が分泌され、雌花を潤わせる。異物の侵入に対する抵抗がどンドンと薄れていく。舌は簡単に肉襞を掻き分け、ぬめぬめとナメクジのように奥へと忍び込んでいく。

「ずちゅ、ずっ、るッ、ぢゆるる」

「あ、やんっ、音立てないで、ウあ、はあ、ひっ」

舌に絡みつく鬘を捲るたびに滴る女水をすすする。地底といえは鬼の本拠地、つまり酒の名産地だが、これに勝るほどに豊かで味わい深く、男としてこの世に生を受けたありがたさを教えてくれるものは、並び立つ酒蔵のどこを探してもないだろう。

もつと味わいたい。そのためにはどうすればいいか？——答えは単純で、この上なくわかりやすい。空をもつと乱れさせてやればいいのか。

「ツあああ！ くうう、パパ、それ駄目、指、指やアあああつ」

女悦にぬかるむ肉豆に節くれだつた指を押し当て、指紋で研磨するように捏ね回す。途端、湧き上がる清水が濃くなり始める。自分の考えは間違っていないかつたのだと、彼は心中で達成感に浸る。

「はっ、あ、んア、あつあつ、はあ」

舌で穿るたび、指で翳るたび、彼女の声はどんどんと高く、甘く、焦がれたものになつていく。腰を盛んに震わせ、両手にも余るだろう豊かな乳房をふるふると細かに揺らして、彼の目を、耳を楽しませる。

——これで抱けたらどんなに良かったか！

そう思うが、それは許されていない。あくまで奉仕のみという条件が出されている。そのため、空との行為は大きな喜びである一方で、大きな苦痛にもなつていた。舌と

手による代替行為も悪くないが、リビドーを発散しきれない。妖しくうごめく濡れた蜜穴にモノを差し入れてこそ、性の悦びだというのに。

「うア、あ、ひい、駄目、ダメ、もうだめ、くる、きちやう、うッ、アあ」

膝をがくがくと震わせ、快楽の終点、オルガズムが近いと訴えてくる。駄目なのか、じゃあ止めてやろう——などという流れには、当然ならない。むしろその逆で、彼は積極的にとどめをさしにいく。蛭のように陰部へ吸い付き、舌を限界まで差し込んで、肉襲を思い切りめぐり返す。ダメ押しに、親指と人差指でもって、硬く真珠のように充血し尖る淫核を思い切り揉み潰した。

「あ——ひやアアああアアアアッ！」

蜜があふれるどころの話ではなかった。びゅじイツ、と、間欠泉のように噴き出す濃い雌汁が、彼の顔面をしたたかに濡らす。これまでのものよりもさらに芳醇な、雌の悦びを体現したかのような絞り汁を。

空は張り詰めた弓のように背をしならせ、その少女らしい外見に似合わぬ大人の声をあげ、身を駆ける快楽に狂っていた。爪先から太腿にかけての筋肉が思い切り収縮している。膣肉は侵入者に絡みつき、絶対に逃さないと言わんばかりに締め付ける。

「あッ、はッ、ああア、ひ、ふッ、うアあ」



狂ったような喘ぎとともに、膝を痙攣させている。壁についた手が、ず、ずず、と  
ずり落ち始める。まずい。彼は直感したが、逃げようにも手遅れだった。

「はあっ」

肺の空気を全て解き放つような吐息とともに、彼女の膝は、主を失った操り人形  
のように、かくんツ、と脱力した。自然、その身体は、重力に従って落下する——彼を  
巻き添えにして。

「ゴッ——」

のしかかられたはずだというのに、視界は一瞬白くなった。板張りの床に後頭部を  
したたかに打ち付けたのだ。女一人の体重を伴って。妖怪でなければ死んでいた。

「ぐ、グ、グムムムム」

「はあ……」

幸福を表す吐息が聞こえる。空は全身脱力させてその場に座り込み、絶頂の余韻に  
浸っているようだった。結構なことだが、その下で押しつぶされている身からすれば  
たまったものではない。ぱし、ぱし、と、太腿を何度もタツプする。

「んは……はっ、わ、わわ、ごめんなさいっ」

二、三十秒ほどはそのままだったろうか、彼の視界が不穩に薄暗くなり始めた頃に

なつて、彼女はようやく我に返つたらしく、顔の上から飛び退いた。

ぶはッ、と、肺へ空気を取り込んだ。顔面に乗られるというのは男のロマンだが、それも時と状況によると彼は学んだ。

「……いや、いや、構わないさ。いい経験ができたからね。……それより、続きだ」  
 何事にも限界がある。我慢にもだ。彼のモノは衣服の中でこれ以上ないほどに膨れ上がつていた。膨らみすぎて痛いぐらいだ。

空とは対照的に、彼はさつさと着物を脱ぎ捨てた。これからすることを考えれば、全く不要だからだ。いらぬものは、さつさと捨てるべきだ。下着をおろした瞬間、散々戒められてきたものが、ぶるんッ！ と跳ね上がった。

「うわ……あいかわらず、すごい大きいねえ」

彼女の語彙ではそのように評するのが精一杯だったのだろう。ともかく、彼のものは通常のものから大きく逸脱しているといえるほど太く、長く、雄々しかった。山のように広く張つた肉傘に対し、カリ首は溪谷のようだ。汗にじつとりと湿つた雄茎の根本では陰毛がぐるぐると生い茂り、男の欲望でばんばんに膨れ上がった睾丸を覆う。名刀、豪槍。まさにそのように呼ぶにふさわしい雄の象徴が、そこにはあった。

「空ちゃんいいね。男はそうやって自分のモノを褒められると、やる気出すからね」

「そういうもの？」

「そうとも。……さあ、こつちが奉仕したんだ、次は空ちゃん番だ」

「いいよ。今日はどうする？ お口？ 手？」

「ううん、そうだな……そうだ、胸でしてもらおうか」

「え……胸で？」

空は首を傾げる。意外な反応だった。これほどの乳をぶら下げているなら、胸での奉仕も当然知っているものと彼は思い込んでいたのだ。とはいえ、知らないのなら、それはそれで教えこむ楽しみが生まれて良い。自分好みに育て上げる愉しみが。

こつちに来て膝立ちになってくれと伝える。空はその通りの姿勢をとる。

「それで、何すればいいの？」

「それより先に、ちよつとだけしゃぶつてくれるかな。濡らしておきたいんだ」

「そういうもの？ いいけど」

空は己の顔ほどもある棒に頭を近づける。熱気の中、衣服の内ですれ違った一物へ。うわ……すごい匂い。やつぱり、水浴びしたほうが、良かったんじゃないかなあ」

呟く声は、どこか呆けたような、上の空のものになっていた。何か別のことに思考を奪われている、あるいは抑制されているときの口調だった。

「はは、すごい匂い、か。良かったじゃないか？ 知ってるぞ、空ちゃん、そういうチンポのほうが好みなんだろう？」

猛々しくそり立つソレが撒き散らす雄臭は、どんな女相手であろうと雌の本性を呼び起こさせる毒だ。夏の熱気で蒸らされたそれは、丸一日煮込んだ豚骨スープより濃密な、一種の劇薬になっていた。そんな対雌用の特效薬を、よりによって零距离で吸入したのだ。ただでさえクンニリングスの性感に乱れた直後である空には、まさに効果てきめん。瞳を潤ませ、尻尻を垂れ下げ、頬を紅潮させて剛なる杭を物欲しげに見つめはじめた。とろんとした、淫らな雌の表情だ。

「好み、だなんて。そんなこと、ない、よお」

せめてもの羞恥か、最低限の自尊心か、口先では彼の言葉を否定する。けれども、その顎はだらりとぶら下がり、可愛げな唇はお預けを食らった犬のようにだらしなく開かれていた。目の前のものを早く迎え入れたいといわんばかりに。今頃、淫らな貝は濡れそぼち、ひくひくと収縮していることだろう。

「そうかそうか、へえ。まあ、いいさ。ほら、啜えてくれよ」

相手がそんな風にまでしているのだから、望みを叶えてやるのが一匹の雄としての努めというものだろう。ぷっくりとした唇や頬に亀頭を押し付け、その感触を楽しみ

ながら促す。女というものは面倒なもので、モノにしゃぶりつきたいと思っても、見栄やら何やらが邪魔をすることがあるらしい。それを剥いで、心にある望みを存分に叶えてやるのは、男の仕事だ。

彼は空に、名分をくれてやった。やれつて言われたんだから仕方ないよね、という名分を。もう、と小さく呟きながらも、表情に隠しようもない期待を浮かべ、彼女はソレを体内へ迎え入れる。

「おおっ……」

声がこぼれ、腰が引けた。彼女の口内は熱く、唾液がねつとりと絡みついてくる。一種の魔境だった。腰回りに浮遊感のようなものを覚える。気を抜けば、あつという間に果ててしまいそうだ。

「んむ、もっ、むうう」

顎を限界近くまで開き、彼女はその長大なる雄槍を深々と啜え込んだ。肉幹に唇をぴっちりりと吸い付かせ、舌でもって亀頭を撫で回す。

「ほっ、おおっ、いいよ、その調子だ」

「えあ、れろ、んむ、えう、ぢゅっ、ちゅうう」

モノから一旦口を離すと、舌をでろりと突き出して、亀頭や肉幹をれるおと舐め

回してくる。時折、充血しきった雄杭のあちこちへ、ついはむようにキスしてくる。

「よし、よし。そろそろいい。空ちゃん、一旦それやめて、胸を下から抱えてくれ」

「あむ、ぢゅ——ぷふ、もういいの？」

「これ以上してもらうと射精そうだからね。それはそれでいいけど、もったいない」

腹の底からこみ上げてくる焦燥を感じ、彼は空を引き離す——物足りなげな表情を、彼は見逃さなかった。

空は指示通り、乳房を両手で持ち上げる。下から加えられた力にふるん、と揺れた。「そう、そう。そのままじつとしてくれよ」

唾液にまみれてぬらぬらと輝く硬いものを、やや腰を落とし、乳房の谷間の下端部から、地面に垂直に差し込んでいく。空はわずかに身を引くが、肩を掴んで止めた。

「嗚呼……」

至福の音が漏れた。下半身が幸福だった。彼のモノは並の男より一回りも二回りも大きかろうというのに、空のたわわな連峰はそれを根本からすっぽり包み、わずかに露出するばかりにしていた。そこはどこまでも滑らかで柔らかかった。唾液のぬめりも相まって、ペニスをみっちり包み込んでくる。夏の熱気のためか、谷底には汗がじつとりと溜まっており、それもまたたまらない。極楽だった。

「ねえパパ、私は何すればいいの？　こういうの、したくないんだけど」

「ああ、そうだな、左右からぐつと挟むみたいにしてみてくれ」

「こう？」

おほッ、と、抜けるような声が零れた。背骨を引っこ抜くような官能が、ぞ、ぞぞと走った。わずかな圧の変化ですらこれほどのものをもたらすのだから、今からすることはどれほど気持ち良いだろう。期待せずにはいられなかった。

「よし、あとはじつとしてくれれば良い。こっちで勝手に、動くからさッ」  
「え、あつ、は、ああん！」

世界一の菓子職人が丹精込めて作ったプリンよりも柔らかな乳へ、腰を叩きつける。肉塊にみっちり包み込まれたモノが、ぬりゅ、ぬりゅりと脂肪をかき分け、空の女の象徴へ己の匂いを染み付かせ始める。

「うお、おア、これは、おオア」

自らの始めた行為によって、彼は切羽詰まった声をあげる。そうなるのも当然だ。

乳による奉仕——男の夢の一つとも言えるその行為は、いざ実現してみると、予想や伝聞をはるかに上回るものを彼に与えた。抽送のたび、亀頭が乳の谷間から現れてはまた潜っていく。その様はこの上なく淫らで、征服欲を満たすものだった。おれは今、

こんな素晴らしい乳房を、チンポで汚しているのだぞ、どうだ！ と。

その刺激的で魅力的な快楽に、男という生物が飛びつかないでいられるはずがない。彼は夢中になって腰を振りたくった。そのたび、ぬち、ぐちと、唾液が粘っこい音を立てる。たわわなる母のシンボルに、雄臭い先走りが塗りこまれていく。

「あつ、ひ、待つて、待つてパパ、ちよつと待つてつて」

空は快楽の喘ぎに混じつて、こちらを制止しようとしてくる。彼は当然、聞く耳を持たなかつた。あるいは持てなかつた。この行為のもたらす官能は、驚異的な中毒性でもつて彼を縛り付けていた。夢中になるという形で彼は操られていたのだ。だが、彼を責めることはできない。ペニスをもつ生物である以上、抗いようのない魅力だ。

「待つて？ 無茶言つちやア、駄目だよ。こんないやらしいものぶら下げてるのが悪い。ああそうだ、そうだとも！」

「そうじゃなくつてえ、八咫鳥に、おちんちん擦れてるのおつ」

——ああ。

そういえば、そんなものもあつた。時折肉竿が、ふにふにとつるつるの中間にあるような妙なものを擦っている感じがしたが、あの気色悪い目玉だったというわけだ。

「で、擦れるからなんだつて？」



その程度のことは、似たようなのを百も集めたとしても、この魅力的な行為を中断する理由になど到底ならない。相変わらず腰を振りながら——それどころか、八咫鳥にモノを押し付けるようにまでしながら尋ねる。

「だから、はあッ、擦れて、あの、いつ、……痛いの」

——はあ？

嘘つけ。直感的にそう思った。空の反応は、どう見ても、痛みを覚えているという感じではない。その声は、自慰を知らなかった娘が、ふとした身体の疼きに耐えかね、無垢な裂け目に本能的に触れてしまったときにあげる声に似ていた。

彼女は、未知の快感に戸惑っているだけなのだ。ここで男としてするべきことは、彼女の言を真に受けて、じゃあやめとこうなどとすることではない。絶対に。彼女に新しい快感を刻み込み、忘れられないようにしてやるというのが、唯一の正解なのだ。「おいおい、そんな雌っぽいイヤライ声あげて、なアにが痛いの、だ。まったく、とんでもない嘘つきだな。そんな娘には、罰をくれてやらないとなア！」

あふれんばかりの乳房から、ぬるりとモノを引き抜く。間髪をいれず、今度は水平方向に、槍を突くようにして、モノを差し込んだ。亀頭が目玉とまともにもぶつかる。

「そらそらそらア」

「ひつ、あ、うああ」

腰をぐいぐいと押し付け、肉剣の切っ先で八咫鳥を圧迫する。空のあげている高くか細い声は、やはり苦痛を表すものなどでは決してなかった。

「ふん、やつぱり感じてるんじゃないか、その気味の悪い目玉突かれて。そんなのでアンアン喘ぐなんて、淫乱にもほどがあるよな。そら、空ちゃんみたいないやらしい娘は、思い切り満足させてやらなくちやなあ」

「んああッ！ ひイ、あつ、へあ、やああ、はつ、ああああん！」

空の身体ごと吹き飛ばすほどの勢いで、ピストンを始める。一突き一突きごとに、がすッ、がすッ、がすッ、と、肉杭は八咫鳥に叩きつけられる。そのたび、空は快楽によがる雌の声をあげる。世界最高の管弦楽よりも耳を楽しませる声を。

「やめてー、なんて言っておいて、あつという間に雌墮ちか。身体も淫らで心も淫ら、男のために生まれてきたみたいじゃないか、ええ？」

口調はだんだんと、荒つぽく、露骨なものに変わりつつあった。彼の中に棲む——全ての生きとし生けるものの中に棲む欲望リドという名の獣が、彼に代わって身体を支配しているのだ。それは空の最高の乳を思うがままに蹂躪し、己の臭いを染みこませるべく、硬き豪槍を深き谷間、男を悦ばすためにあるような谷間に突き込んでいく。

「やアツ、はあん！ そんなことつ、あるわけ、ないい」

「本当か？ だったらなんで俺みたいな男とこんなことしてんだ？ チンポがでかいだけで他に取り柄もコネもないような土蜘蛛相手に？ まさかマジで小遣い稼ぎとか言わねえだろ？ たかだか野菜の代金掠め取ったつて、雀の涙もいとこだ。お前のカラダなら、その十倍だろうが出す奴はいるつての。おら言ってみろ、何のためだ」

「あツ、はあツ、ひん、くうアアア……！」

空は答えなかった。けれども彼が言葉を重ね、剛直を打ち付けるたび、声のトーンを上げて身を震わせる。彼からすれば、それがもう答えのようなものだった。

「言えないのか？ なら俺が言つてやるよ。それはな、お前が淫乱だからだ。チンポならなんでもいいつて本性の淫乱女が、それを悟られないように、小遣い稼ぎのためだつてどう考えてもレートの場合ねえアホみたいな言い訳使つたつてのが真実だ。合つてんだろうが、エエツ？」

「はっ、ひいッ、ああんっ」

突くたびにふるふると震える肉球を、その奥に鎮座する神をすこすこと犯しながら、高圧的にたたみかける。空はなおも答ええない。叩きつけられる快樂が、言葉の形成を阻害しているようだった。彼は舌打ちした。

「答えろつってんだよ、ヒンヒン喘いでんじやわかんねえだろこの駄パイがア！」

「ひいひいアツ!？」

腕を振りぬく。ぱアアン、と、乾いた小気味良い音が響く。無駄と称した豊かな山へ張り手を食らわせたのだ。彼女の口から上がったのは、今度こそ本当に苦痛を意味する悲鳴だった。

「良い音するじやねえか。オラもう一発だツ、言わねえと何発でもやるぞコラ！」

彼は振りかぶる。空は慌てて口を開いた。

「うあ……そうですね、私は男の人とすけべなことがしたくて、適当な言い訳つけてるだけなんですつ、いろんな人に、パパになつてもらつてえつ」

「か、ようやく正体現したかよ！ つまりテメエは淫乱ビッチでこつたな！」

「はひつ、私は、空は、おちんちん大好きな淫乱ビッチですうつ」

屈辱的な自己評価を強要されながらも、彼女は安堵の表情を浮かべていた。これでもう叩かれまいだろうと。彼が好きなのは、そういう勝手な期待を裏切ることだ。

「へっ、なるほどな。正直者にはご褒美をやるよ！ よかつたね空ちやアアン！」

「ひいひいアツ！」

またしても、今度は逆の手で張り手を放つ。双山の両方が、紅く色づいた。彼女は

「またも悲鳴を上げる。だがそれは先ほどと比べ、どこか艶やかだ。」

「なんだア？ ぶたれてるのに感じてんのか、へ、大した女だな、アア!?」

「ちがつ、今のは、あ、は、んんっ」

反論を封じるように、空の乳房を、雄に屈した柔肉を犯す。むにゆ、ぐにゆ、と、そこは柔軟に形を変えながらも、モノを、彼のカラダを確かな弾力で押し返してくる。彼女は完全な雌の声をあげ、その悦びを教授する。

「今まで嘘ついてたよなあ、嘘をよオ。ぶたれて感じてたくせに違うなんつってよオ。誰にでもこんなことする上にマゾで嘘ついたア本格的に終わってるな、根っこっから性根叩き直さねえとどうにもなんねえよな、これはよオ！」

「ああああああッ！」

一息にまくしたて、一方的に教育を宣告する。豊かな両峰の頂上で桜色に自己主張していた尖りを、彼は思い切りつねりあげ、引つかかった戸棚を引つ張りだすような勢いで引つ張った。空は背をのけぞらせる。その表情は、甘やかながらも歪められた奇妙なものだった。苦痛と快感の両方を受けているのだ。

「おいおい、これは矯正だつて言つたよなあ、なのになアに感じてんだよ、おいッ」  
「ヒツ、ウあ、ご、つめんなさ、あアッ、でもおっぱい気持ちいいの、痛いのにい」

「ふん、とんでもないマゾだな、オラ、だったらもつと痛くしてやるよ」

ぐいぐいと、手綱を繰るようにして、乳房を上下左右にそれぞれ引く。その間も腰を振り、肉槍で八咫鳥を貫く。ベクトルを別とする二種の快感に、彼女はただ身体を跳ねさせ、悲鳴とセツトの嬌声を垂れ流すばかりだ。

「はあ、駄目、パパ、くる、きちやうの」

「何だ、何がくるんだ。言わんねえと分かんねえぞコラ」

「イクつ、胸でイクううつ」

「はッ！ 乳弄られただけでイクのか、さすが淫乱、スケベな身体しやがってよお。

いいぜエ、イけよ、ついでに俺も射精して、この化けもんみてえな乳、パイズリ専用オナホールに仕立てあげてやるッ」

「あアツ、して、してえ、わたしのおっぱいパパ専用にしてええッ」

上等だ、と彼は吐き捨てた。もとよりそのつもりだったのだ。それが、相手の同意まで得られたのだから、これはもう何一つはばかることなどあるまい。

「そらッ、イけやア！」

渾身の一撃を八咫鳥に叩きこむとともに、雄に媚びたような乳房を身体ごともっていくつもりで引つ張る。それがとどめとなった。

「あッ、はア、ひいひい——ッ！」

容赦ない一撃は、期待された役割通り、彼女を絶頂せしめた。空は大きくのけぞり、額に浮かぶまるとい汗を弾けさせる。半ば白目をむき、狂ったような悲鳴を撒き散らす。

「出さず、射精すぞオ、お、おとおおッ」

睾丸が収縮し、内にたつぷりと溜められた欲望を吐き出し始める。尿道を通り外へ解き放たれ、乳房の溪谷の外を白く犯し始める——八咫鳥までも。

「あ、アあッ、うあああアッ」

びゅぐ、びゅぐと、乳肉に包まれたモノが脈動し、雄の滾りを噴出するたび、空は痙攣するようにがくがくと震える。肉体だけでなく精神までもが絶頂を迎えており、穢らわしい種に汚されることに悦びを覚えているのだ。

「うおおお、おとおッ、おとおおウ」

一方の彼も彼で、狂犬病にかかった犬のような唸り声を上げながら、最高の肉体を己の思うがままに蹂躪し汚すという愉しみに溺れていた。

空の肉体は、男を悦ばすためにあるかのような柔肉は、己を陵辱するモノから少しでも多く恵みを受けようとするかのように、彼のペニスにみっちり絡みつき、白濁を搾り取ってくる。自らの手で扱くときなどは比べ物にならないほどの子種が出、

深い谷の底や、無感情な目玉をどろどろと白に染めていく。

「ふうウウツ、おおおツ、つふうツ……おお、すっげえ射精た」

尋常でなく長い射精も、そのうちに終わる。ひどく満足気な溜息を一つつき、柔肉のなす深い隙間から、彼はようやく這い出した。

「はーア、立派なもんぶら下げといて使わねえ手はねエと前々から思ってたが、いざ使ってみると思つた以上だったな、どんだけザーメン搾り取る気だったんだっての、このパイズリオナホ乳マンコがよお」

モノにべつとりとまとわりついた様々な汁を、もはや彼のものとして墮した乳肉に擦りつけて落とす。空は嫌な顔をしなかった——というより、何の反応も示さなかった。激しい精神的絶頂から、一時的に戻つて来られなくなっているようだ。

なんだ、つまんねえな、と、彼は空の頬をぺし、ぺしと軽く叩く。それでも彼女は起きない。どろどろの乳房を驚掴み、溜まった白濁を擦り込むように擦り合わせる。

ぬる、どろ、とした感触が次第に粘度を増し、にぢや、ぬぢといやらしい音をあげる。「ご開帳つと」

乳房の隙間を開いてみれば、ねとお、と子種が糸を引く。八咫鳥は変わらず無機質な目でこちらを見つめていたが、白濁まみれでは不気味さも失せる。



「おら、尿道に残ってんのも吸い出せよ、お前が射精させたんだからよオ」

舌打ちしながら、ぼつてりとした唇に亀頭を押し付ける。自我を喪失しているはずだというのに、雌の本能が奉仕せねばならないとでも感じたか、彼女はモノに口付け、ぢゅ、ぢゅ、と音を立てて吸う。

「おお……おう、そうそう、それで良いんだつての。分かってんなあ」

彼の口調は崩れたままだ——否、これこそが彼の本性なのだ。女を女とも思わないような、身勝手な雄こそが。

「はーア、射精した射精した。やつば自分でセンズリぶっこくのととは違エなあ。……おう、もう帰っていいぞ。つーかいつまでもいられると目障りだからとつと帰れ」

欲望を満たせた以上、彼女になんの用もない。省みることもなく事務的に言い放つ。使用後の性処理用の女マシコに、何故親切にしてやる必要があると言わんばかりだ。

「……ね、え、パパ」

「ンだよ」

再び舌打ちした。いいから黙って帰れよ、という苛立ちを隠そうともしていない。見れば、空は寝転がって、こちらへ脚を広げていた。とろとろと涎を垂れ流す秘具に指をかけ、体奥まで晒しながら。その様の淫らさときたら、並の男ならその様だけで

精を放つてもおかしくないほどだ。

セックスを求めている。それは口に出すまでもないほどに明らかだった。願つてもない好機だった。空との関係は短くないが、その行為だけはついぞ許されていない。

それを向こうから求めているのだから、これをチャンスといわずして何というだろう。

だが、彼は商人だった。商人に求められる条件は、ひたすらにがめつくあることだ。常に最小の時間で最大の利益を得られるようにするのが、彼らの仕事なのだ。

ゆえに、彼女に覆いかぶさり、濡れた穴にモノをねじ込むことを、彼はしなかつた。代わりに、内心の達成感を隠しながら、冷たい視線を投げかける。

「何やってんだっての。邪ア魔だつってんだろ、はよ帰れやコラ」

「そんな——」

帰れ、などとは言うが、本気ではない。聞くまいと分かった上での言葉だった。

空は瞳にうつすら涙を浮かべていた。彼は取り合わず、それどころか邪険に扱う。

「大体お前、何がしたいワケ？ 汚ねえ穴アおっぴろげてよ、目障りだつての」

「それは、その、ぱ、パパと、セックスがしたいなあ、つて」

何度もペッティングに興じた関係でありながらも、やはりその行為は特別な意味をもつのか、空はやや口ごもりながら答える。そしてその赤裸々な願いを、彼は蹴る。

「はア？ やだね。もう射精すもん射精したし興味ねえよ。大体、セックスなしってハナシだったろうが。それをお前、なに今更変えようとしてんだよ」

「それは、その、してあげてもいいかなって」

「はああ？ してあげてもいいだど？ 脳味噌までデカ乳にもつてかれてんのか？ 顔と胸がいいだけだろお前、マンコ買う価値なんかねえよ、気づけやそんなくらい」

実際、今すぐにでもあの穴にねじ込んで気絶するまで犯し抜いた後、たつぷり種をつけてやりたい気分だったのだが——彼はそれを気合でねじ伏せた。半勃ちに戻ったモノが、先ほどの威容を取り戻しそうだ。もう少し後でないと、台無しになる。

「そんな……私いま、すぐくつらいのに……」

空は半ばべそをかいていた。疼く食欲な肉体を持って余しているのだ。——生物は、性欲には勝てない。彼女とて同じことだ。今なら何だろうが通る。そう判断した彼は、攻めの手を打ちにかかると。

「話はちやんと聞けつて言われてねえのかよ。買うだけの価値はねえ、と言ったんだ。タダなら……いや駄目だなそれも。逆にてめえが俺のチンポ買うなら、考えるが」

「買うつ、パパのおちんちん買うから、野菜のお金あげるから」

聞くだに惨めな声を上げ、彼女は脱ぎ捨てた服から財布を取り出し彼に渡し、その

脚にすがりつく。ひふ、み、と当然のように数え——足りねえ、と払いのけた。

「うーっほ、ちゃんよお、お前、ザーメンつてもんが一体どれだけ貴重か分かって言ってるのか？ あア？ 足りるわけねえだろうがこんな端金だよオ！」

怒号とともに、ぐしゃぐしゃに握りしめた札を投げつける。お願い、お願いだから、と空は繰り返す。惨めだね、と内心で嘲笑いながら、彼は続ける。

「足りねえ分は別のもんで払ってもらうぜ」

「別の——八咫鳥の力とか」

「要るかバカ。そうだな、てめえが地霊殿抜けて、俺用の性処理肉便器になるんなら考えてやる」

彼女の話をただ受け入れても、一度きりのセックスで終わる。それでは勿体ない。どうせなら、いつでも好きなきときに犯せるようにしたほうがずっといい。

「言つとくが、一切容赦ナシだ。二十四時間三百六十五日、俺がやらせろついたら股開いてひたすらハメられる仕事だ。野外だろうが人前だろうがな。福利厚生なんざねえし、辞職なんざもつてのほかの仕事だ。死ぬまで休まずキリキリ働け」

それは、たかが一時の身体の疼きを鎮める条件としては、あまりに不釣り合いな、足元を見た要求だ。彼自身それは分かっている。それでも提案したのは、彼女に断る

道がないと知っていたからだ。性欲はときに、損得を超越する。乾きを抱えた者からすれば、それはふざけた代価などでなく、絶対に受けるべき魅力的な提案なのだ。

「なる、なります」

「は？ お前本気かよ。俺は断らせるつもりでふっかけてるんだぜ？」

「なる、なるの、地霊殿出てパパの肉便器になるから、だからおちんちん……」

口端が歪むのを、手で押さえて隠す。濡れ手に粟とはこのことだ。空のような娘を、勞せずして手に入れられたのだから。ちよろい。ちよろすぎる。

「へ、主人捨ててチンポ取んのかよ。ご大層なこつて。じゃアほら、誓いのキスだ」

「はい……」

取り返しのつかない行動をとるべく、空は彼に口付けようとする——彼は思い切りピントを食らわせた。

「何バカなことやってんだバカ。主人と接吻？ 百年早えよ。大体お前さつきチンポ唾えたらうが汚えな。いいか、肉便器がキスすんのは、いつだつてここなんだよ」

彼は己のモノを指さした。先ほど散々吐精し、半勃ちになったモノを。

「おちんちんに……」

「バーカ、チンポだチンポ。カスが、ものの言い方もなつてねえのかよ。前の主人は

どういふ教育してたんだ、つたくよ。そら、チンポだ、言ってみろ、チ・ン・ポ」

「ち、ちんぽ、おチンポお」

いいからとつととしやぶれつての、と吐き捨てる。空は彼のもとに跪き、あんぐりと口を開く。そして、肉便器としてのファーストキスを、彼のペニスに捧げた。

「んもつ、ぢちゆ、ぢゆる、えるう」

熱かい悩む神の火、便器に成り下がった

今までの自分から生まれ変わったのだという自覚が芽生えたか、口淫は先ほどよりはるかに熱心なものになっていった。唾液をまぶし、口壁で擦り、舌を絡め付け、さらには睾丸を指先で優しく転がしてくる。空の胸を見るも無残に汚すほど射精したにも関わらず、ペニスはすぐ、先ほど以上の立派な姿を取り戻す。

「あー、ふん。まあまあだな」

彼は自らモノを引き抜く。内心、舌を巻いていた。危ないところだった。もし先に射精していなければ、すぐ果ててしまっていたことだろう。それはあまりに情けない。「よし便器、さつきみたい壁に手えついてケツ突き出して、ついでに指で汚エ穴アおっぴろげとけ。とつととしろマンカス」

「はいっ」

ペニスと別れさせられ、幾分か寂しげにしていた彼女は、その一言に瞳を輝かせた。

いそいそと立ち上がり、指示された通りの格好になる。淫唇は期待にばくばくと開閉し、熱くとろみを帯びた本気の汁を涎のように零している。

貫かれる瞬間を待っていたのだろう、空はそのままじつとしていた。彼はその尻に、今日何度目かの張り手を繰り出した。

「いア！」

「ボケ。まだ肉便器つてもんを理解してねえのかカス。主人に気持ちよおく射精していただくのがためえの仕事だろうが。リップサービスくらいできねえのか、ア？」

「あ、ご、ごめんなさい」

「バカみてえに謝ってねえで、とつととやれ」

「ぼ、パパの立派なおチンポ、私のダメダメなお便所マンコに突っ込んで、ズボズボして、大事なザーメン、好きなだけびゅっびゅっしてください」

「……ほーお」

彼は下顎を撫でる。仕込みなどないわりに、なかなか凝った言葉を吐くものだ。股間のものがいきり勃つ言葉だった。雌メという生物は皆、便器としての素養を持って生まれてくるもので、それが発揮されたのだろう。おチンポ下さい程度の貧相な台詞だったらもう一発二発ピンタしてやるつもりだったのだが、どうも矛先が失われた。

ふん、と鼻を鳴らし、いきり立つモノを、淫らに蠢く膣口に押し当てる。

「肉便器つてのは基本ゴミだ。そんな中でも中出しされたことのない肉便器なんてのは最低も最低、存在してることを全世界に謝罪すべきゴミ以下のもんで、死んだほうがいい。で、てめえは肉便器になってから中出し未経験、つまりゴミ以下だ、死ぬ」

「そんな——」

「が、今からこの俺が中出しする。よつてお前は死ぬ必要なし！ 言つてみれば俺はお前の所有者で、命の恩人つてわけだな」

「ありがとうございます」

声は本気のものだ。根がひどく素直な分、こういうところの教育は楽なようだ。

「感謝なんか要らねえから、代わりにちつたあ締めろよゴミ！」

「あッ、はアアアアアア！」

不意をついて一気に貫く。地底中に聞こえるほどの声が響き渡る。待ち望んだモノの悦びを、彼女は全身で表していた。

一方の彼も、腹の底から呻きを零した。バカだのゴミだのと散々罵つたが、空の膣はひどく具合が良い。膣肉はふわりと、しかしこれ以上なくしつかりと締めつけ、襲はかり首や肉幹をぬるぬると愛撫してくる。魔性すら秘めているような、まさに名器



だ。これほどのものを彼は知らない。じつとしていても果ててしまいうさだ。

彼女は、便器という肩書きにはそぐわないが、鑑賞する楽しみを所有者に与える。なにせこの顔つき、体つきだ。地底の太陽の如き可愛らしさ、それと裏腹のたわわな乳房、豊かな尻は、丸一日眺めていても飽きない。とはいえ、ここまでは彼も知っていた。そしてそれに加え、実用性も保証された。これだけの穴なのだ。少し仕込めば、そこらの娼婦などは比べ物にならないほどに育つだろう。原石とは彼女のことだ。

「便器になるために生まれたようなカラダだな、おいッ、どうなんだ」

「はひ、その通りですつ、わたしはお便所になってお精子を吐き出してもらうために生まれました、あつ、ひい、アアはつ」

「激しい抽送を受けながら、空は喚く。真偽など問題ではない。主人の言葉こそが、彼女にとつての真実になるのだから。」

「へ、堕ちちまつたらタガが外れたみてえだな、よおし、便器になるために生まれたてめえを、今後たつぷり躡けて、立派なザーメン搾り機にしてやる、悦べやアツ」

「あはアア！」

犯される悦びに踊り狂う女穴をぬぐぬぐと突きながら、尻をパアンと張る。上がるのは悲鳴でなく嬌声だ。反応に味をしめ、二発、三発と続ける。たつぷりとした尻は

そのたびに小さく波打ち、紅く染まって彼の目を楽ませる。

「ああそういうえば、お前さつき俺がケツ穴触ったとき嫌がったな？」

「んツ、ひい、もうしわけ、ありませツ」

「申し訳ねえで済むかア！ 主人に齒向かう道具がどこにいるってんだ、アア!?」

「アあああツ！」

突くたびに奔放に揺れていた左乳を、握り潰すように揉みしだく。あのやりとりの時点では、彼女はただの地獄鴉だったわけで、彼の論はいささか理不尽だ。しかし、空は反論しない。主人に口答えする道具など、言語道断である。

「いいか、お前の全部は俺のもんなんだよ、ケツ穴もな。そうだ、せつかくだから、今から仕込んでやるとするかアツ」

言いながら、ペニスを勢い良く引きぬいた。ぐぼつ、と、空気混ざりの間抜けな音が響く。空が声をあげる暇も与えず、亀頭を肛門に押し付け、一息に腰を叩きつける。

「ツ——いいいいいいいいアアツ！」

「うるせツ」

あがったそれは悲鳴ですらなく、絶叫だった。思わず顔をしかめるほどの音量だ。事情を知らないものなら、人殺しでもあったかと思うことだろう。

「うるせえな、これでも被って黙ってるや」

「あア、う——もご」

そこらに転がっていた、彼女の持参した手提げを被せる。多少ましになった。そこまでしておいて、彼は空が叫ぶ原因となったモノを引き抜くことはしなかった。

空の腸内は狭く、みち、ぎちと悲鳴をあげていた。肛門での経験がないのだろう。

妖怪の頑丈な肉体でなければ、とつくに裂けていたはずだ。限界なのは明らかだった。

「おーッ、もぐ、ごお」

「へっへ、頑張れよオ、頑張ってケツマンコ締めてりや、早く終わるかもなア！」

袋の内からももごと呻く声が聞こえるが、無視して抽送を始める。強烈な抵抗があつた。まぶされていた愛液がローション代わりになつているとはいえ、一方通行の場所へいきなり異物を逆走する形でねじ込むこと自体が無茶だ。

「おっ、いいじゃねえか、マンコとはまた違って、みっちりキツキツですよ」

とはいえ、そんなことは彼女の都合であつて、彼の気にすることではない。ぬご、ぬごと、腸内の蠕動を楽しむようにピストンする。

「おっ、おウ、ウア、あああア」

「袋かぶせたのは正解だったな。静かで。あんまアンアン喘がれてもなんか萎えるし。

おらッ、ケツマンコの処女ッ、喪くした感想はッ、どうだよッ、言ってみろ」

「もごつ、ぐ、もぐおおおッ」

「おーっと、喋れねえんだっけー。へへへ！ なら好き放題やらせてもらうぜ」

ぼっん、ぼっんと腰を叩きつけながら、彼は下衆に笑い、尻肉をリズムミカルに叩く。空は何事か呻いているようだったが、無視する。

彼女の背徳の穴はぬめぬめとモノに絡みついてきていた。ただしそれは、雌穴の鬩が雄を求めるのとは違い、己に入り込んできたものを異物と認識し、追い出すためのものだ。——彼にとつてその違いは、官能を煽り立てるスパイスにしかならなかった。己のモノが小さなおちよぼ口にぐぶぐぼと出入りするのを眺め、彼は優越に浸る。

「オラア！」

「ンおお！」

限界ぎりぎりまで引き抜いておいてから、ずどん、と突き刺す。彼女は背を反らし、くぐもつた声を零した——先ほどまでとは明確に質の違う声を。

「へ、軽くイツたみたいだな。人生初のケツイキはどうだよ、アア？」

「はえ……はひ、あひゆ、へあ……」

妖怪は頑丈で、苦痛への耐性も高い。彼女の身体は早くも肛虐を受け入れ、そこに

快樂を見出しているようだった。先ほどまでは外へ外へ追いだそうと蠢いていた腸壁が、今や中へ中へ取り込もうとするかのように蠕動している。

空にかぶせた袋を、彼は取り払う。そして顔をしかめた。痛みと快樂、そして袋を被っていたことによる酸素不足を同時に押し付けられたためか、彼女の瞳はあらぬ方を向き、目尻は涙、口端は涎を零していた。言葉にならない声が漏れている。

「あらら、ぶっ壊れてやがる。こんな不細工な面は見る価値ねえな、萎えちまう」

あくまで己の都合だけ考えた言葉を吐いて、彼は再び袋を被せる。空は抵抗しない。「さて、ケツもマンコにしてやっつんだ。今度は両穴穿り返してやらアツ」

腰を引き、肉槍を引き抜く。ぐぼツ、と、菊穴はペニスと別れたくないとでもいうかのように絡みつき、卑猥な音を立てる。そして、腸液がべつとりと絡みつく汚れたモノを、彼女の聖域に再び突き立てる。

「おおツ、すげエ締まる。へへ、ケツ穴開発するとマンコの締めも良くなるらしいが、ありやマジだったのが証明されたな。いやアこりやいいな、けけけけ」

きゆうきゆうと絡みつく肉襞をめぐり返しながら、乳房を揉みしだく。ぴんと尖る木苺のようなそれを、親指と人差指で挟み、ぐにぐにと摘んでは時折弾く。我が物顔とはこのことだ——事実、それは彼のものだった。今の空は彼の所有物（物）、その双丘も

当然彼のものだ。

「へへ、両穴イイ感じじやねえか。おいどうだ？ 交互にハメられる気分はよオ」

「んオツ、お、うツ、んんツ」

突いては引き抜き、挿れては突き、という具合に、交互に両穴を抉る。そのたび空は身を震わせ、両穴を犯される快楽に狂う。獣じみた呻きが、袋の内から響いた。

「そらツ、ケツ、ケツ、マーンコ、ケツ・マンコ、ケツと見せかけてマンコつとオ」

「んおおおツ！」

同じ責めばかりではマンネリを招く。マンネリを招けばつまらなくなつて飽きる。

そうならないための交互の抽送だが、それも同じリズム・同じパターンで行つては、結局同じことになつてしまう。故に彼はリズムを変え、フェイントを織り交ぜ、多様な責めを加える。その全てが彼女に官能を与え、狂女のようなよがり声をあげさせる。

「オツ、ア、もぐ」

彼女の身体が崩れ落ちる。度重なる快楽に膝が耐え切れなくなり、脱力したのだ。

彼はソレを、腰を抱えて止めた。

「オイ何してんだよ。そりや便器にやマンコとケツと乳あたりがありや足りるけどよ、支える土台てめえがサボつてちや話になんねえだろが、聞いてつかコラ甘えんなコラ」

適度に乗った腹肉を抓り上げながら言うが、空は反応しなかった。再び袋を外す。どうやらのびてしまっているようだった。あれだけの目に遭わせれば当然だろうが、彼は反省することもなく舌打ちする。

「ンだよ根性ねえな、ちよつとハメてやつただけでこれかよ。ふざけんよ、肉便器のくせによ。——ちツ、しようがねえ、ここは一発、気付け食らわせてやるかア」  
雌穴をずぶずぶと犯しながらも、そこらを転がる野菜を彼は品定めする。——アレぐらいで許してやろう。足で手繰り寄せたのは、一粒一粒がしつかりとした、立派なトウモロコシだった。

「おーい、お・き・ろ・やツ！」

拾い上げたソレを、菊穴へ押し当てる。——そして、強引に挿入した。

「いいいアああッ!？」

零れたのは悲鳴だった。身を割り開かれる痛みが、彼女を強制的に目覚めさせた。トウモロコシは半ばほどまでねじ込まれていた。ただでさえ太く長大な彼のものよりさらに大きいものが、先ほどまで処女だった門へ這入り込んでいる——無茶どころの話ですらなかった。彼女の肉体を破壊するためにしているのだと考えたほうが自然なほどの仕打ちだ。

「ようやくお目覚めかよオ。つたく、なに居眠りぶっこいてやがんだつての。さつき俺言つたよな、肉便器の仕事は二十四時間<sup>年</sup>三百六十五日<sup>中</sup>だつてよ、ああ？ テメエに休みなんざあるわけねえだろうがコラ、分かつてんのかコラア！」

「うあ、アアツ！ ひ、イツ、ああはアアアツ！」

湧き上がる理不尽な怒りに任せ、彼はタツクルしているのかというほどの勢いで、腰を振りたくる。大業物たる槍の穂先で、子宮口をガツンガツンと突いていく。手でトウモロコシを鷲掴み、菊門があげるぎちぎちという悲鳴も無視して抽送する。

「ハッ、二穴同時のほうが始まりがいいじゃねえか、ド淫乱が。こんなもんケツ穴にぶっこまれるのがイイつてのか？ ならもつとやってやんよ！」

抽送のたび、菊門に潜り込んだ太すぎるほどのモノの存在が感じられ、悪くない。調子に乗つた彼は、どんどんとピストンを速く、荒々しいものへ切り替えていく。

ぬごぢゆぶぢゆぢゆぢゆと、あらゆる音が、被虐の場所と化した彼女の二穴から響く。それぞれの快樂が互いに影響しあっているのか、突けば突くほど、犯せば犯すほど、彼女の体内はどんどんと異物を抱きしめるようになっていく。

「オラオラオラッ、子宮の形も変えてやるよ、ガキ作る機能なんざいらねえだろッ」  
「あひ、あああひええあ」



彼女の雌穴では彼のモノを収めきるには到底足らず、降りてきたポルチオに亀頭が  
がんツ、がんツ、とぶつけられている。子をなす聖域が駄目になつてもおかしくない  
行為を、彼は平然と行う。肉便器の正しい使い方は一つ、自分の欲望が最優先、だ。  
綺麗に使いましよう、大事に使いましようなどという決まりは、どこにもない。

「オオおおア、おほ、ツ、おうツ、おア、ほおおツ」

彼女の表情に、平素の可愛らしさはどこにもない。口をだらしく開けて舌を突き  
出し、下品な喘ぎ声を撒き散らして快楽に狂う様を、普段の彼女を知るものが見たと  
して、霊鳥路空であるとすぐには分からないだろう。

「汚エ面しやがつて、グツチャグチャじゃねえか、そんなに俺のチンポがいいか！」

「イイツ、チンポいいいつ、へあ、おちんぽおツ、いいのおおツ」

「そうかよ、それならイキ死ぬまでハメ殺してやらア！ オラ死ぬツ、死ぬツ！」

狂つたような言葉に嗜虐を煽られ、彼はこれまで以上に抽送を早めていく。彼女の  
肉畑を耕し、穿り返し、許容範囲を大幅に超えた快楽信号を叩きつけていく。

陰唇も菊門もそれぞれを犯すものを受け入れ、ぐぼ、ぬぼ、と猥褻な音をたてる。  
十分もない間に、両穴は子を成す器官・排泄のための器官から、男の性処理のための  
道具へと完全に成り下がっていた。

「アア、イクツ、イクうううツ」

「上等だつととイけやコラ、生まれて初めての両穴アクメ迎えるツ、俺も射精すぞ、便器の中にぶちまけてやる、嬉しいよなオイ、本来の『使い方』してもらえてよオ」

「はいいいツ、おザーメン排泄してもらえるの幸せですウウツ」

「ケツ、だが孕むんじやねえぞ、便器にガキなんざ要らねえんだよ、孕んだら捨てツからな、いいかつ」

「はひ、アひ、孕みません、私の子宮は精子の貯蔵所であつてえつ、子供作るための場所じゃないのでえ、絶対ぜつたい孕みませえんんつ」

喚き散らしながら、空は猿のように腰を振りたくる。彼はそれこそ猿のように紅く染まった尻をまたばしインばしインと叩きながら、彼女にとどめをさしに行く。

「オラツ、イけや——ツ、おとおおおとおおツ！」

「あへ、くる、くるうううツ、ひいああああアア——ツ！」

腰を突き出し、モノとトウモロコシとをそれぞれの穴の奥の奥にまで突き入れる。さらに抱えた彼女の腰をぐいと引き寄せる。互い違いのベクトルが組み合わさること、刺突の威力は最大にまで高まる。それが彼と彼女との両方を達せしめた。

先ほどの激しすぎるほどの射精にも関わらずぱんぱんに膨れていた睾丸から、再び

白濁が放たれていく。今度は空の、女として、そして便器として欠かせない場所へ。聖域の入口にびっちり押し付けられた鈴口からびゆるびゆると放たれたスperlマが、小さな室をどろどろと埋め尽くしていく。無数の子種が子宮を泳ぎ、孕ませるべき卵を探して子宮頸管を逆流していく。だが、それは無駄な行為だ。靈鳥路空は女である以前に便器である。便器の子宮とは男を悦ばすためのものであつて、子を宿すためのものではない。どれだけ子種が必死になろうと、卵子と結びつけなどしないのだ。

「おおツ、いいぞオツ、もつとちんこからザーメン吸い出せエツ」

膣肉は忠実に仕事をこなす。己を刺し貫く雄々しき槍の脈動に被虐の悦びを覚え、モノを歓待し、搾り取るように蠕動する。

「ああ、へあツ、ああひ、いい、あ、はあああツ」

空はただひたすらに、がくがくと痙攣していた。目からは涙、口からは涎、鼻からも汁を零し、全身汗や汁にまみれながら、致死量にも等しいほどの快楽に狂っていた。淫裂はぶしツ、ぶしイと断続的に濃厚な雌汁を噴射して彼の腹から脚、床を汚す。

「ぬうううツ、おおツ、ううううツ」

精液どころか、体内の水分全てを吸いだされているかのようだった。空同様、彼もまた快楽の大波に翻弄されていたのだ。ぐり、ぐり、と、ぷりんと丸い空の尻肉に腰

を押し付け、睾丸の中に溜められた精虫を全て吐き出さんとする。

「ツ……はーア、射精た射精た」

「ああ、ひああツ、へ……ああ……」

長い長い射精が終わる。それに伴い、空の痙攣も治まる。満足気な溜息を吐くと、役目を終えて萎えたモノを、彼は手早く引き抜いた。空の腰を解放する。もはや自立することすらかなわず、彼女は勢い良く床に崩れ落ちた。

「ああ、どうりで重てエわけだよ、全体重預けてきてやがったな。根性なしがよオ」  
転がる汗まみれの豊満な肉体を足蹴にする。空は何の反応も示さない。瞳は虚ろで焦点を結ばず、なにも映してはいなかった。肩が小さく上下しているあたり死んではないのだろうか、今日はまだ使い物にならないだろう。苛立ちまぎれに舌打ちする。

「あ？ ……おいおい、何垂れ流してんだよ、折角射精してやったモンをよオ」

放り出された両脚を無造作に広げ、その間の秘められるべき場所を無遠慮に見る。嫌というほど吐き出された子種が、どろどろと溢れ落ちている。

「オイ、聞いてんのか、あ？」

「ツ、あ、……う、あ」

淫蜜や汚汁にまみれ白く輝くくろくろとした陰毛を思い切り引っ張る。反応は薄い。

菊穴に潜り込んだままで、蠕動に合わせて小さく動いているトウモロコシを弄くる。やはり反応は薄い。どうも完全に駄目なようだった。

「あーあー、駄目だこりゃ。チツ、便器としては悪かねえが、使い捨てなんじゃなあ。鍛えねえと使えねえわこりゃ。……おう、とりあえず栓しといてやるよ」

「アツ」

そこらに転がっていた人参を、ぐぱ、ぐぱ、と収縮する膣肉にねじ込んで蓋にする。空は小さく肩を震わせたが、それはあくまで生理的の反応であって、意識を取り戻したというわけではなかった。

「ふん。これでいいだろ。……今日はこれぐらいで勘弁しといてやるが、明日からは覚悟しとけよ、泣こうが喚こうが気絶しようが、その駄目マンコとクソケツマンコがぶつ壊れるまで、つーかぶつ壊れてもチンポ突っ込みまくってやるからな」

虚ろな顔に唾を吐きかけながら、彼は人を人とも思わないような言葉を投げかける。「もつと鍛えて人前に出せるレベルになったら、客を取らせてやるよ。よかつたな」

自分はタダで好き放題に使えるものを、阿呆どもは高い金を出して買う。最高だ。最高だと思っっているのは、彼だけではない。彼女の口は、気を失っているはずであるにも関わらず——小さく、笑みを形作った。



洩矢 諏訪子

諏訪子のペニスとハードボイルド・セルフセックス

土蔵の中から気を張り巡らせ、神社の周囲に誰もいないことを確かめ続けていた。盗人のように執拗だ。早苗も神奈子も出かけており、参拝客も来ていないというのに。「……そ、そろそろいいかな」

そうし続けて十分、彼女はようやく気を緩める。本当に大丈夫か、誰か見逃したりしていないか、という心の意地悪な声を振り切る。気にしていたらキリがない。

小窓から光が差し込み、埃の舞うのが見える。黴の匂いもする。そういうアンダーグラウンドな雰囲気は、これから人に言えないことをするのだという興奮を煽った。入口は呪術や結界で封印され。外から中への移動を、徹底して阻んでいる。ここは今、幻想郷で最も安全な場所だ。鼠一匹どころか、あの隙間妖怪ですら入り込めまい。

そこまでしてしかなかったのは、危険な企み、怪しげな密談——ではない。

壁際に姿見が立てかけられている。早苗が生まれたときに買い、ほとんど使われず放り込まれたものだ。埃よけの布を払いのける。映るのは見慣れた自分自身の姿だ。際立つて可愛らしい以外は、普通の少女に見える。——およそほとんどは。

スカートの一部が、内側から押し上げられるようにして、わずかに膨らんでいた。その膨らみをじつと見つめる。やがて彼女は、おもむろに服に手をかけ、脱ぎ始める。一枚一枚、ぱさ、ふあさ、と音を立て、身にまもっていた衣類が、木の床へと落ちる。



そのたび、心臓は強く速く打ち始める。やがて彼女は、生まれたままの姿となった。その頃には、耳の奥で太鼓にも似た音が聞こえるほどになっていた。

再び、鏡の中の己を見る。頬を紅潮させ、犬のような浅い呼吸を繰り返している。さほど暑くないのに、うっすら汗をかいている。やや日焼けした肌は桜色に染まり、平坦な乳房の先は小さく尖って自己主張している。愛らしさの中に一抹の大人らしさを備えた肉体は、他者を男女の別なく吸い寄せせる。しかし、そういう魅力と関係なく、誰もが注目するだろう身体的特徴を、彼女は抱えていた。

くりんと窪んだ臍から少し下ったあたりで、己の存在を世に知らしめんと、それは上向き、反り立っていた。体格に不釣り合いなほどのそれは、紛うことなき男根だ。それも、大の男と比べても相当立派だ。まさに男と呼ぶべき猛々しい魔羅<sup>ベユース</sup>が、彼女の股間で怒張っていた。彼女の身体の少女らしさ、可愛らしさ、美しさ——そういったものをまとめて否定するかのようには、それは鎮座している。赤黒い亀頭に凶悪に張るエラ。びきりと硬直した肉幹で、血管が蛇のように這い回っていた。

「あはあ……」

雄臭がむわあ、と湧き立つ。雌を虜にする香りが。深く息を吸う。フェロモンは、放った本人をも魅了する。小さく、そして淫らな溜息が零れた。目尻が垂れ下がる。

それは、どこをとつても、雄だった。それも圧倒的な雄だ。洩矢諏訪子の少女性は、ほんの一箇所の齟齬によつて、ものの見事なまでに破壊されていた。

しかしそれは、最高の絵に塗られた泥ではない。雄壮なる肉の槍は、可憐な少女の肉体と合わさつて、新たな魅力を生み出していた。妖しく背德的で、人を引きずり込む底なし沼のような魅力。下手をすれば取り込まれ、どこまでも沈んでしまふというのに、淵を覗きたくなる——そんな有無を言わさぬものが、そこにはあつた。

その魔性とでも呼ぶべきものは、何かがわずかにでも狂えばたちどころに全て崩れ去る、そんなぎりぎりの均衡の上で成立していた。ただ一つの肉体の中での、男女の極限の緊張。言葉では、その凄まじさを説明しきることはできない。人によるところのものである言語が、どうして神——人智を超えたものを語りえようか。

そして、彼女からすれば、己の姿は畸形でもなんでもなく、ごく自然なものだった。神の姿も有様も、人の物差しでは測ること能わない。目を洗つたら子が生まれる種族に、生物学上のオス・メスなどという分類は適用不可能だ。

「——はあ、は」

しかし。長く人の世にあり、人の考えを知っていた彼女は、鏡に写る己を、異常なものとして捉える。その思考がもたらすのは、嫌悪や羞恥ではない。性的興奮だった。

——浅ましく、欲深く、醜い、惨めで、汚らしくてグロテスクなものをぶらさげて、そのことに欲情までして。見られれば身の破滅だというのに、なんて穢らわしい！

心のなかのまともな自分が、自分を罵った。冷めた蔑みの言葉をぶつけられるたび、呼吸は甘く熱く荒くなる。耳の音で、梵鐘のような音が聞こえる。はて、ここは神社なのだが——否、これは己の心音だ。快楽を待ちわびて高鳴る、己の本性の媚声だ。股座のモノが熱を孕み、びくびくと震えている。腹の奥でとぐるを巻いていた欲望という名の怪物は、解き放たれる先を求めて暴れ始める。抑えようなどとは思わない。不可能だからだ。代わりに、それを満足させるために動き出す。

「ん、あ、ひっ！」

可愛げな掌が下腹へと運ばれ、小さな指先がソレに触れる。あるかないかも曖昧な刺激に、彼女は腰を震わせる。太腿がぞくぞくと痙攣し、姿勢がぐらりと崩れた。

「っはア」

床に手をつき、支える。痺れるような甘い余韻が身体に残っていた。

少し触るだけでこうなるのなら、直接触れば、一体どうなってしまうことだろう。ごくん——と、唾液を飲み込んだ。覚えたのは少しの恐怖、そして大きな期待だ。

床にぺたんと尻をつく。立っていらなくなるのは目に見えているからだ。続いて、

両脚を大きく開く。雄オスの部位と雌メスの部位の両方が鏡に映し出される。猛々しい肉杭に、ぴっちり閉じる湿り気を帯びた女裂。それらは彼女の瞳を惹きつけてやまない。

再び雄棒へと指を伸ばす。蝸牛の這うような速度で、肉竿を掌で包み込んでいく。ひどくもどかしい。今すぐにでもその欲望の象徴を握りしめ、気も狂わんほどに扱き、奥で煮えたぎる雄のヘド口を思い切り解き放ちたくなる。しかし彼女はそうしない。小さな体の内でめらめらと燃え上がる焦燥、理性と欲望のせめぎあいを楽しんでいた。焼けた鉄のようなモノを、なめらかな掌が慰撫する。貪欲な肉塊は、この程度では足りないとの不満をぶつけてくる。鈴口から、蜜ハチミツのような液体液体が滲しみんだ。空いた片手の指先でそれをつい、と掬い、柘榴ザクロのような舌でちろり、と舐めあげる。

「んはあああああつ……」

たつたそれだけで、頭が歓喜にうち震えた。悦びというハンマーでもって、脳天をかち割られるような衝撃だ——理性などという気取り屋の軟弱者は、一瞬で死んだ。

「ひっ、は、ア……んんいいいいいいッ！」

片手では足りない。両手で握りこむ。一瞬の躊躇をおいて、引き抜くほどの勢いで、激しく扱き上げ始める。電撃にも似た快感が、手のストロークのたび、肉棒から全身へ駆け巡る。背を海老反りにし、目をかっと思開き、激しすぎる快感に揺さぶられる

しかなかった。小さな身体に対し、快楽があまりにも大きすぎた。だのに両手は容赦なく上下し、性感帯たる雄のシンボルを、磨くように責めあげていく。

「うあああアツ、ほッ、おアツ、ひい、いーッ、ああはアアツ」

先走りが潤滑油となり、にぢにぢにぢと汗気の少ない音をたてる。合わせるように、全身が痙攣する。上体を起こし続けることもできなくなり、仰向けに倒れる。過ぎた電気刺激に腰が浮かぶ。爪先はびいん、と伸ばされた。ブリッジしているようであり、生きたモニUMENTのようにも見える。

可愛げな少女が、涎を垂らし、汗と聞き苦しい嬌声を撒き散らして、己の股間からびいん、と天を指すモノを必死に、猿のように扱き上げる。それは異常だ。異常さは背徳を喚起させる。彼女の行為は、万物を引きずり込む哲学的な淫らさを備えていた。「おツ、おううつ、ほおおつ、あはっ、ひい、ひい、いいいとおおおうツ」

彼女が得ているのは、神をも発狂させんほどの官能だ。間違はなく危険であるにもかかわらず、彼女は、というより貪欲きわまる彼女の欲望は、まだ足りないと訴える。神に男女の別はない。そういう人の常識の外側に神はある。ならば、どうして自分は、男の悦びだけに溺れているのか？ 神だというのに、普通の男でも楽しめるような、人の常識に則ったやりかたで、己を慰めているのか？ いや、そんな理屈はどうでも

いい。とにかくもつと気持ちよくなりたくて、しかもその手段は存在する。だったら飛びつかない道はない。それだけだった。

すつ、と、右手をモノから離れた。途端に、欲望が不満に暴れ始め——は、しない。それは底抜けに食欲な獣だが、お預けを食らっているのと、もつと大きな餌のための準備期間にあるのを区別するくらいの分別はあった。今は後者の時間なのだ。

期待に潤む女の入口に、人差し指を押し当てる。腹子の奥窟がじゆうん、と熱くなり、蜜を分泌し始める。気持ちいいのが来る、という期待の音が聞こえてきそうだ。

指先を動かすと、水音がした。これだけ濡れていれば、まどろっこしい真似は必要ない。指先に少しずつ力を込める。毛の一本も生えていない、しかし子をなしたこともある密やかな樂園は、異物をこれから受け入れるのだという喜びに疼き、収縮した。どうせ誰も見ていないし聞いていないのだから、思いつきり満足するでしょう——いや、もうスイッチが入ってしまった以上、見られていようが聞かれていようが、我慢や抑制などできなかつたろう。

「——ツ、ひ、あ、這入ってくる、ひツ、は、あひ、あはああああツ！」

上がった声は、未成熟な外見に見合わぬ、盛りきつた雌の媚びた嬌声だった。実際、細い指が、ほんの一本忍び込んできたただけだ。しかし、指の細さと同じほど、肉穴も

狭い。膣肉は割り開かれ、神経は次から次へ脳に信号を投げる。快樂という信号を。

表情は性の悦びに蕩けていた。稚氣を残す造形に似合わぬ、淫りがましい、娼婦の表情だ。指を潜らせる、たつたそれだけの刺激で、彼女の女性は、性感に堕ちていた。だが、不足だ。世界が陰陽で成り立つのと同様、肉悦もまた陰陽によつて成立する。自慰が性交に劣ると考えられるのは、どちらか片方しかないからだ。幸いなことに、彼女には陰陽ともに備わっている。一人でも、快樂キョクという完全ケンな世界を創造できる。

「あッ、あ、あ、ああ……」

できることをしない手はない。膣道へと入り込んだ指先をわずかに曲げつつ、もう片手で再び陰茎を握る。これから気も狂うほどの官能の嵐に曝されるのだと思うと、言葉にならない声が零れる。感情が昂りすぎた結果、生まれたものだ。それは、ただ感情と呼ぶしかないものだった。期待、喜び、不安、恐れ、緊張、そういったものが混ざり合つた、正とも負とも断じがたい混沌としたものだった。そして彼女は、ただその未分化なものに命じられるがまま、両手を動かし始める。

「ッ——ひ、いッ、あ、はああアアアア！」

それは神社どころか、妖怪の山全てに響き渡るほどの、悲鳴にも似た叫びだった。抑えるなどという小賢しい真似は不可能だ。彼女が前にしているのは、洩矢諏訪子と

いう自我を吹き飛ばしかねないほどの快樂なのだから。

かは、と、咳にも似た音が零れる。肺の中の空気が全て吐き出されたのだ。だが、叩きつけられたエクスタシーを受容しきるには不足だ。目を見開き、打ち揚げられた魚のように口を開閉させる。爪先から太腿、背筋・首筋まで、筋肉が鉄の棒になったように硬直していた。

「はッ、ひッ、いいッ、気持ちいいッ、ほっ、お、ア、おアアッ」

それだけのものを得てなお飽きたらず、両手を動かしていく。掌は熱く硬い肉杭をへし折るほどの勢いで扱き、肉幹から亀頭までソリツドな快樂を叩きつける。秘裂を荒らす指は人差し指と中指の二本に増やされ、聞き苦しい水音と共に膣襞を滅茶苦茶に掻き混ぜる。雌と化した女穴は、歓喜の歌の代わりに汁をあちこちへ撒き散らす。

「ほ、おひッ、あは、いいッ、おちんちんおまんこッ、いい、あひ、イイいいッ」

口は理性なき言葉を涎とともに垂れ流す。知性の欠片もない狂女のような声音だ。

ペニスを扱くたび腹の奥が引き締まり、膣肉を黴れば男性機能が裏から刺激される。陰が陽を、陽が陰を高め合う、快樂の螺旋階段を、ひたすらに駆け上っていく。

「あアアッ、ひ、あッ、変態っ、へんたいへんたいわたしへんたいいいッ、おちんちんゴシゴシして、こんなだらしのないメスの顔してエッ、あっ、ひっ、ほおおッ」



鏡の中の己は、犬のように舌を突き出し、涎を垂らし、目を蕩かせ、男女の快樂を貪っている。誇りも尊厳もない姿は、彼女自身をこれ以上なく昂らせていく。

「ひッ、は、アアッ、あはッ、イキそ、イキそう、私イキそうッ、だつてそういう顔してるもん、あたまおかしいイキ顔オオオッ、はひッ、アひッ、イクイクイクイクッ、おちんちんザーメン射精しながらメスマンこイクウウウウッ」

自分を罵りながら、近づいてくる大きな波の予感に、芋虫のように身をくねらせる。再び仰向けになり、空中に腰を突き上げた。同時に、それは彼女へ襲いかかった。

「はッ、アッ、イクッ、アクメくるッ、ひいッ、あ——はッ、ひッ、んひいひいひいああああああああああアッ！」

片手は陽を、潰すほどの勢いで握り、根本まで一息に抜き上げる。

片手は陰へ、子宮ごと貫くほどの勢いで侵入し、全ての襞を捲る。

そこに世界が完成した。どこまでも白い世界だ。何も無いのではない。快樂が埋め尽くしているのだ。彼女はそこへ放り込まれた。唯一の異物めがけ、宇宙が殺到する。突き立てられた伝説の剣のように、突き上げられた腰からモノがそそり勃っている。その先端から、噴水のようにとめどなく、熱く粘ついた濁液が迸る。それは龍となることを目指して滝を登る鯉のごとく空へ向かい、しかし物理法則には勝つことなく、

蠅の翼を太陽に溶かされたように落下を始める。ほかならぬ彼女の肉体へ。穢らしい欲望によって、染み一つない肌が汚されていく。雄の臭いがむわりと巻き上がった。このメスは我々が汚してやったのだ、とでも主張するかのよう。

白い本気の女汁をとると垂れ流していた鍾乳洞のような女陰は、限界を超えて収縮していた。侵入者を搾り取ってやるのだともいうように。肉褌は指を千年来の恋人のように抱きしめ、うねり、悦ばせる。ぶしいいつ、と、雌の香りのする透明な汗が間欠泉のように勢い良く噴きだし、床へ彼女の匂いを染み付かせていく。

それはたった十秒もないほどの出来事だった。だが、天地開闢から今までを百回も繰り返したほどに思われた。いくら小さかったとはいえ、生じた宇宙一つ分の快樂をまるまる平らげたのだ。それだけの長さに感じられるのも当然というものだった。

「あひツ、あつ、は、へあ、お、ほおつ、ひ、あ、あーつ、ああーつ……」

大股を開き、氣狂いじみた表情で快樂の余韻に喘ぐその様は、潰れた蛙のようだ。快樂に顔をだらしなく蕩かし、肌を桜色に染め、乳房の先端を痛いほどに充血させ、淫裂から雌汁を垂れ流す。白濁にまみれ喘ぐ様は、この世界でもっとも淫らだった。五分ほど、荒く呼吸しつつ、ただ寝転がっていた。余韻に浸っていたのもあるし、動けなかったというのもある。激しすぎる絶頂は、彼女の体力を全て奪っていった。

どうにか動ける程度までようやく回復して、重たい身体を引きずって起き上がった。神殺しは容易ではないが、危うく自分自身でそれを成し遂げるところだった。下手をすれば、本当に自我が消えていた。それくらい快感だった。

「ああ……ああ、こりやひどい」

鏡を見やる。全身汗まみれで、白いものにまみれている。股間のものは欲望を吐き出しきったことで、先ほどとはうってかわって萎れ、重力に従い下向いていた。

どうやって洗おうか——そんなことを考えつつ、腹にぶちまけられた白濁を指先でつい、と掬う。白く、べっとりとした、雄の欲望<sup>スベルマ</sup>。これを出したいという思いが己の頭を蕩かし、気も狂わんばかりの快楽の中へと飛び込ませたのだ。白濁はそのことを悪びれていないかのように、ねばねばと指先を汚している。

——ふと。それを舐めてみたいという欲求が、彼女の中に浮かんた。頭を振って、否定する。これは雌を墮とし、屈服させる劇薬だ。舐めなどすれば一発で頭をやられ、あの狂おしい嵐に放り込まれることになる。勘弁してくれ、さすがに体力の限界だ。

しかし、そのような理屈とは別に、指は徐々に徐々に口元へと近づいていく。体力の限界など、快楽という目的の前には些事にすぎない、と主張するかのよう。

「じぶん、のだなんてエ」

首を振り、否定する。そんなのは異常極まることだ、と。その言葉を待っていたかのように、雌としての己が反論する。異常だからこそ愉しいんじゃないかと。

身体は後者の言い分を受け入れた。理性と欲望とがぶつかり合ったとき、魅力的な主張をしているように聞こえるのは、いつでも欲望の方だ。

「んぢゆう……」

ねつとりと汚れた指先が唇に触れる。ふわア、と、雄特有の蛋白臭が鼻先に広がる。女性をもつもの全てに、当然彼女にも作用する、濃い性臭だ。そのまま、口の中へと迎え入れる。苦味とわずかな酸味とが混ざった雄々しき味が、口内を占領する。味覚と嗅覚からの同時攻撃に抗えるわけもなく、腹の底から、またあの甘い疼きが昇る。生物としての根幹に根ざす、原始的な欲求の疼きが。

掌を、白濁まみれの腹に押し当てる。生暖かな感触が伝わる。胸へ滑らせる。ぬる、ぬちゆるる、と、白の絵の具のような粘りが、薄く、満遍なく塗り広げられていく。

「はああ……」

至福を意味する溜息が零れる。ほんの十秒前まで、体力の限界がどうこうと考えていたが、もうそんな思考は消え去っていた。この悦びをもっと味わいたいと、自分の肉体というキャンパスに、両手で絵の具を塗りたくる。

汗気の少ない粘ついた雄の滾りを、石鹼か何かのように肌へと擦りつける。ぬるり、ねぢやり、にぢり、と、それは次第に水分を失い、耳につくいやらしい音を立てる。

無数の子種が、彼女の皮膚を孕ませんとするかのように群がっていく。

爪先、ふくらはぎ、膝、太腿、腰、尻、腹、乳房、背中、腋に鎖骨の窪み、肩、腕、顔——全身余すところなく、臭いたつ濁液が刷り込まれていく。

こんなことをしたら、オスの臭いが肌の下にまで染み付いて、二度と取れなくなる。するとどうなるか？ 性の匂いをぶんぶん撒き散らし、道を歩けば、男からは下衆な、女からは蔑んだ視線を向けられ、あいつは色狂いの変態だ、神でなくただの色情魔だ、などとひそひそと噂されるのだ。神社からも人の足は遠のくだろう。生命線たる信仰を得られず、気狂いのレッテルを貼られたまま、惨めに消えるのだ。

「はア、あん、ああつ——」

その空想は、空想のまままでとどめおくべきもの、決して実現してはならないものだ。だというのに彼女は、その暗く甘い誘惑に魅せられていた。また陰部へ手をそれぞれ伸ばしていく。陰茎は、あれほど激しく精を放ったというのに、あの猛々しい獣の姿を取り戻していた。白濁のべつとりとへばりつく掌で、それを握りしめる。

「ほおつ、あへッ、いいッ……！」

自身が吐き出した子種が自身に纏わりつく。勇壮なる棒が、情けなく汚されていく。彼女はそのまま、ソレを扱き始めた。ずる、ぬちゅ、と、精液がローションになり、先ほどまでとはまた違った快感を与えてくる。

「んッ、ひッ、おっ、ほおおッ」

下半身を蕩かすような快感に間抜けな声をあげながら、立ち上がる。鏡の前で腰を突き出し、がに股の姿勢になる。下品だ。下品であることが、むしろ興奮を煽った。腕を固定したまま、中空めがけて腰をへこへこと振る。にぢっ、にぢつと音を立て、指で作った輪の中を肉槍が貫いていく。

「へっひ、おおっ、手えっ、手まんこ気持ちいいっ、センズリキンもちいいイイツ」

品も知性も全くない言葉を、自ら使っていく。それは興奮を煽るスパイスとなる。高ぶるがままに彼女は、再び雌穴へ指を伸ばしていく。それは興奮を煽るスパイスとなる。

こんなものを挿れれば、自分で自分に腔内射精なつかだししているも同然だ。ただでさえ神は目を洗えば子ができるほど多産なのだから、孕んでもおかしくない。宿されるのは、父も母も己である子。なんとふしだらで、道徳にもとることだろうか。まさに禁忌だ。だからこそ、彼女は指に力を込める。先ほどさんざん穿り返したにも関わらずなお期待に疼いている、ぴっちりと閉じ未熟である一方で、魔性を秘めたその女穴を。

「く、あッ」

ゆっくり、ゆっくりと馴らすように、体内へと呑み込ませていく。たつぷり三十秒ほどかけて、ようやく第一関節ほどまで這入り込んだ。

「はア、ひい、ひ」

指紋の凹凸が感じられそうなほど、膣内は敏感になつていた。先のように容赦なく搔き回してもしたら、狂つてしまうのではないかとすら思える。

快感で、狂つてしまう。その発想は、してはならないものだった。本能という名の我儘な猛獣が、思い切り刺激された。快樂狂いで己の欲を追い求めることしか考えず、挙句その結果何が起るかは全く考慮しないけどものが。その獣からすれば、それはひどく魅力的で、飛びつかない術のない類のアイデアだった。

「はア、つひ、——ああああああああああああオオオオオオオオオオオアッ！」

響いたのは、獣の咆哮だった。白目をむいて涎を垂らし、声帯を限界まで震わせる。ぶしッ、と、淫裂から雌の香りのする汁が噴き出し、床を汚していく。膣肉はきつく収縮し、異物を抱きしめる。肉棒から白濁が放物線を描いて床を汚す。絶頂、それも激しいオーガズムの兆候だ。指を挿入ただけで、彼女は達していた。

脳細胞全てに電気信号が流される。エクスタシーを意味するシグナルを。その処理

に追われ、思考が停滞する。生じた空白へ潜り込んだのは、脳のもつと根幹に根ざすもの——単純かつ強力で貪欲極まりない怪物怪物だった。

己の状態を鑑みて行動するなどという、曖昧で複雑で器用な行為を、所詮ひとつの目的のために生み出された野獣が行えるはずもない。ただ自己の飢えを満たすというシンプルかつ唯一の目的へ、それはまっしぐらに向かつていく。

「ンあツはあア、おほッ！ ひい、ウア、へっ、あア」

両手が再び動き始める——が、そのストロークはひどく歪で、不自然なものだった。素人が操るパペットのようだ。いかに本能が強力な命令を下そうとも、体はまともに対応できる状態ではなかった。アクメの快楽はいまだに身を駆け抜け、痙攣や痺れをランダムに産みだしては、ありとあらゆる所作を阻害していた。

「ひい、ひいッ、アツ、はアああ」

だがそのぎこちなさは、他人に弄くり回されているような感覚を産み、性の悦びをかえって増大せしめた。にぢにぢや、ぐちゅぐぶと、様々な水音を、まるでそういう楽器であるかのように鳴らしながら、彼女はより深く激しく行為に没頭していく。

「へひッ、ほオ、アアひッ、んッ、くひイあアあッ！」

呼吸のたび、濃い性臭が肺の中で循環する。あれだけ身体に塗りたいのだから、



そうなるのも当然だ。嗅覚を雄々しい臭気に占領され、興奮はこれ以上なく高まる。

彼女は一つ、新たな事実を見つけた。性の真理をだ。これまで、絶頂こそが快楽の終わりだと考えていた。違った。オーガズムに至るまでの経緯に快楽という螺旋階段があるように、絶頂もまた、踏みしめ、駆け上がり、頂点へと至るものだったのだ。目尻から涙が零れた。苦難に満ちた冒険の果てに黄金郷エルドラドを見つけた探検家の涙だった。まだ、踏み至るべき先があった。未だ見たことのない頂点へ、彼女は近づいていく。

「あああああ、くるうウツ、いく、いくつ、いくつ、イクウウウツ！」

両手だけ別の生物になったかのように剛棒を抜き上げ、雌穴を穿つ。亀頭は赤黒く、肉幹はグロテスクなほど膨れ上がっていたし、淫裂からは粘っこい熱い女汁が湧水のように溢れては腿を伝って零れ落ちていく。

いく、いく、とひたすら喚き散らす様は、さながら白痴だった——否、その比喻は不適切だ。誰もがその淫らさに目を留める白痴など、この世に有り得るはずがない。あるいは、だからこそ、彼女は白痴のようだった。彼女はこの世ならざるもの、神だ。ありえるはずのないものこそ、彼女を諭えるにふさわしい。

「あツはア、ヒイ、おうツ、イク、イクイクイクイクイクうううアアア——ツ！」

駆け上る速度に対して、道のりはあまりにも短かった。そこは楽園だった。幻想郷

も一応楽園と銘打つてはいるが、これに比べれば屁でもない。脳味噌を快樂と幸福の混合液に漬け込んで、その二つ以外全て取っ払った、そういう楽園だ。

「アアアアアツ、うあああツ、アへつ、はあひいイイイツ」

全身からあらゆる汁を垂れ流し、身をかくかくと震わせるさまは、危険な病の発作でも起こしたようだ——あるいは、それは確かに病なのだろう。末期の色狂いだ。

瞳はあらゆる方向を向き、焦点を結んでいない。もはや現実を映してなどいなかった。桃や紫を基調としたサイケデリックな、しかし理性を突き崩すほどに甘美な光景を、幻視していた。それこそが、彼女にとつての真実だった。この世で最も強力なクスリでも、これほどのものは味わえないだろう。鮮烈などという言葉で足りないほどだ。今彼女は、洩矢諏訪子という名も捨て、快樂の空を飛んでいた。

——やがてそれは終わる。幻想郷での時間でいえば、十秒にも満たないオーガズムだった。けれども、彼女からすれば、生まれてから消えるまでを一億回繰り返すほど長い期間だったように感じられた。驚くべきことに、それだけの時間をかけてなお、まだ足りない、と感じられた。麻薬と比べてすらも比較にならないほどの中毒性だ。

「へ……あひ、い……あは、おお……ツ」

うわ言のように快樂の余韻を垂れ流していた。いつの間にか、床に倒れ伏していた。

あれだけのものを受けて立っていられるという方が不自然であるから、当然ではある。己が吐き出した精液が、そこら中にべつとりと張り付いている。蔵の中は、濃厚な香りで満たされていた。初な早苗は顔をしかめるだけで、その正体に気づきもしないだろうが、神奈子あたりならすぐに理解するだろう。

「それは……困るねえ。バレるのは」

存在ごと消滅させるほどの恍惚を潜り抜けてなお、そのようなことを考えるだけの余裕があった。しかし、すぐ起き上がって掃除するだけの体力は残っていなかった。

ごろん、と仰向けになる。激しい呼吸に、平たい胸が上下している。自身の身体を見やる。汗や白濁、女のとろみにまみれ、無残な有様だった。肉棒も、流石に硬さを失い、炎天下の蛙のようにぐったりと横たわっていた。

——前座にしては、結構楽しめたかな。

前座。そう、あれだけのものでは、彼女にとっては前座でしかなかった。いや、得たものなど関係ない。一人で粘膜を擦る限り、どれだけの快楽があろうとお遊びの領域を出られない。本邦最初の神話（註）においてすら、出っ張ったところを窪んだところへ入れて国を作った。つまり、性の悦びにおいては性交（セックス）こそがその最大のものなのだ。彼女はニンフォマニアだ。常に最大のエクスタシーを追求する。性の悦びの最たる

ものがセックスなら、自慰であつても、セックスをおいておく術があるだろうか？

普通なら、一人でセックスはできない。いくら両性具有でも不可能だ。——しかし、彼女は神だ。神とは、人の身では成し得ないことを成すものである。

「自分とセックスすることだってできる」

「そう、神様ならね。……なあんて」

分霊というものがある。ある神社から分祀すれば、その社にも同じ神が宿るのだ。

これは単に神を二分割することではない。同一であり同一でないものを作るのだ。

神は遍在する。だからこそ全国に、稲荷だの八幡宮だのと名のついた神社があるのだ。

そして、彼女はその分霊を生み出したのだ。たった今、洩矢諏訪子は二柱ある。

新たに生まれた彼女もまた、その股座にモノをぶら下げていた。

「我ながら、本当頭回るねえ。八百万の神々でも、こんなことに分霊を使おうなんて思つたの、私ぐらいなもんじゃない？」

凶悪にエラを張らせ、大蛇のように血管を這わせ、雄のフェロモンを匂い立たせるそれは、紛れもなく諏訪子のモノだ。分霊もまた洩矢諏訪子であるという証拠だ。

「そんなことより、ねえ、早くブチ込んでよ。分かつてるでしょ、私なんだからあ」

諏訪子は四つん這いになると、新たに生み出された己に対し、尻を高く突き出した。

そのまま、小さな腰をくねくねと妖しく揺らめかせる。

けれども、分霊は反応しなかった。ただそこに突っ立っているだけだった。何を、  
と思ひその顔を見やる。嗜虐の色を浮かべていた。——次に彼女が何を言ってくるか、  
すぐにわかる。己自身なのだから。

「ダメダメ。何言ってるの。貴重な神の種だからさあ、自分自身とはいえ、おいそれ  
とはくれてやれないよ。代償ってもんが必要じゃないの、たとえば、そうだね」

分霊はぐるりと回りこむと、こちらへモノを突き出した。むわりと、強烈な雄臭が  
漂う。己の匂いであり、己自身の匂いでない、矛盾を孕んだくらくらする香りだ。

「私の風祝どれいとしてさア、世話してよ、コレ」

ニヤニヤと、彼女は笑っていた。数百年前の神奈子の失敗をネタにして笑うときの  
表情を、数倍いやらしくしたような笑みだ。

我ながら、下衆なことを考えるものだ。けれども、逆らいようもない。こんなモノ  
を見せつけられて、従わずにいられる女などいるはずがないのだ。

「はい、失礼します……あもツ、んんふ」

膝立ちになり、それを口内へ迎え入れる。他ならぬ己のモノを。味覚と嗅覚から、  
オトコの魅力とでも呼ぶべきものが脳へと侵入してくる。思わず視界が揺らぐ。それ

は危険なまでに、彼女の中の雌性を揺るがした。

「んる、ぐぶツ、んむお、ぐもう、ふウ」

唇を窄め、頭を前後させる。亀頭に口壁を押し当てる。エラから肉幹にかけて舌端と舌腹を絡め、くまなく撫で回していく。自分のモノであるがゆえ、どこをどう刺激すればよいかというのは、考えるまでもなく分かる。

「あつはアツ！ はっ、んん、さすが私、すっごいねえ。口の中とろつとろで、絡みついて、そうだよねえ、だつて私おちんちん大好きだし」

ぞぞぞ、と、分霊の腰が震えている。さぞ気持ち良かろう。どのような快楽を得ているのかも、容易に想像がつく。想像がつくがゆえに、それを味わいたいという欲がもちあがる——萎えていた彼女のモノも、再びもちあがつていく。

「あれツ、何？ 勃起した？ ちんちん唾えて？ さつき散々出しといて、まだ満足してなかつたんだ。へえ、猿みたいだね。我ながら呆れるよ」

分霊はそれを見逃さない。一言一言聞かせるようにゆつくりと、言葉で責め立てる。己から受ける罵倒に、股間のモノはさらに膨らむ。奉仕に、いつそう熱が入り始める。

「うわ。何、責められて興奮してるんだ。やめてよね、あんたは一応私なんだから。自分がそんな変態だつて思いたくないね。そんな奴は、こうしてあげようかッ」

ぐ、と、ペニスに圧がかけられる。分霊の小さな足が載せられていた。上から押し潰すようにして、ソレを土踏まずと床の間に挟んでいる。

「んツ、ふツ、ぐう！」

身じろぎすると、鈍い痛みが走る。離すつもりはないらしい。逆の立場だったなら、自分も離さないだろう。

「ほらほら、なアにやってんの？ 口がお留守だよ？」

頭を掴まれる。嫌な予感がした。それは間違いなく的中する。分霊も洩矢諏訪子だ。自分ならどうするかを考えれば、次の行動は自ずと見えてくるのだ。

「んぐツ！ ごぶツ、おオツ」

果たしてその予想は当たった。頭が激しくシエイクされ、いきおい、口内をモノが荒らしまわっていく。喉壁をしたたかに突かれる苦痛に、くぐもった悲鳴が響いた。

「あはっ、コレ結構気持ちいいかも。ちょうどいいや、このまま一回射精するまで、あなたの口、使うから」

好き勝手を並べ、彼女は己たる存在の頭を、ゴムボールよりも乱雑に扱う。ばんツ、ばんツと、顔面へ腰を叩きつけていく。肉の剣が、口腔を刺し貫く。

「ぼツ、オゴツ、ぐエ、オおっ」

聞き苦しい声があがる。喉の粘膜を抉られることによる生理反応だ。それは当然、苦痛を伴った。しかし、同時に倒錯をもたらしてもいた。体奥までペニスに——己のペニスに汚されていくことの興奮を。

「アははっ、こんな風にされてまだちんちん勃てるんだ。変態すぎでしょ。あんたホントに私なの？ ほら、もつといじつてあげようか、惨めに喘がせてあげるよッ」  
「んんふうウウッ！」

一方で、向こうもまた倒錯を覚えていた。自分でありながら己でない存在を罵り、虐げているという異様な状況に昂っていたのだ。その昂りは、分霊の嗜虐心をさらに煽ったようだった。モノに載せられた足に、さらに体重がかけられていく。潰されてしまうのではという恐怖とともに、性感帯を乱暴に刺激される快楽が駆け抜ける。

そうしている間も、分霊は己の快楽の追求を怠らなかつた。諏訪子の頭へ容赦ないストロークを繰り返し、己の豪槍を満足させんとする。諏訪子も、ただ使われているばかりではない。空気の抜けるような間抜けな音を立てつつ、唇で肉幹を扱き上げる。吸い付き吸る音も加わった。物のように、取り替えのきくどうでもいい物品のように扱われながらも、彼女は自身に課せられた仕事、ペニスへの奉仕を忠実にこなす。

「へえええ、何？ 必死じゃん、オナホールみたい」



分霊は楽しくてたまらないというふうに言い放つ。性具扱いされ、雌性がうずいた。「さてと。信者に対してもそうだけど、献身的な態度には褒美をあげなくっちゃ……あんたみたいな変態にびつたりの、とびつきりの褒美をさ！」

「んぐおんん！」

ぐに、グツ、ぐい、グツグツと、ペニスを圧迫される。足踏み式の空気入れを使うときのように、リズムカルに思い切り体重をかけてくる。亀頭は鬱血し、赤黒に紫が混ざったような色合いになっていた。このままでは血が集まりすぎて破裂するのではないかとすら思わされる。痒みにも似た痛みが肉茎の根元から先端にかけてびりびりと響く。それは彼女に対し、中毒性のある甘美な感覚をもたらす。痛いけれど気持ちいい、が、痛いからこそ気持ちいい、にすり替わる。それこそまさに、被虐嗜好だ。

「んぶツ、もツ、ご、んぶツ、ぐぶツ、おぼつ、おウツ、お、ご」

激しく脳を揺さぶられ、口内を攪拌され、意識が朦朧としているところに、痛みと快楽をセットで流し込まれる。彼女は己に、己のペニスに、確実に屈しつつあった。

「あつ、そろそろイキそうツ、口の中に全部吐き出してあげるからちゃんと飲んでよ、ほら、あんたもイキそうなんでしょ、特別に射精させてあげるツ」

言いながら、分霊は彼女のペニスをすべすべとした足裏でもって擦り上げていく。

滑らかな足裏と硬い床の感触に、こみ上げてくるものを抑えきれなくなる。

分霊も限界らしい。諏訪子の最も深い所へ、最後の一撃が叩き込まれる。勢い良く頭を引き寄せて、食道にまで侵入してきた。ごりつと、亀頭が粘膜を思い切り削ぐ。

「はあああ、イクイクうツ、ほら全部飲めつ、自分自身のザーメンで喉まんこ種付けされながら、汚い種ザーメン惨めつたらしくぜエンぶ吐き出しちやえエツ！」

「んもツ、ほツ、ぐ、おオ、んごオおおお——ツ！」

鉄砲水のような射精が始まった。容赦なく、食道めがけて白濁が注がれる。胃袋を孕ませるといわんばかりに、無数の精虫が食道を下っては胃液によつて焼かれていく。拷問のような行いに、しかし諏訪子はエクスタシーを感じ、またも絶頂した。幾度と子種を放つたはずのものは、先に勝るほどの勢いで、餅のように白く濃い種を放つ。それは分霊の足や床をねとねと汚していった。

「足汚しちやつてさアツ、そんな悪いちんちんはヘシ折つてやろうか、ほらアツ」

がすがすと、ソレを踏みつけながら、分霊は高笑いする。頬は性の興奮と高揚感で紅潮していた。虐げ、虐げられ、どちらも恍惚を覚えていた。

「ンオツ、グ、お、オ」

死にかけのバツファローのようなうめき声を上げながら、彼女は全身をだらり、と

弛緩させていた。モノに口腔を犯され続け、ほとんど呼吸できていなかった。酸素が足りていない。視界が薄暗くなつていく。落ち際になつて、脳は快樂物質を分泌した。「んん。はあー……つ、ふう。気持ちよかつた。さつすが私、つて感じかな」

その頃になつて、分霊はようやく彼女を開放した。ずるお、と、ペニスが食道から引き抜かれる。ねずみ返しの原因で、エラが粘膜をさらに抉つた。

「——か、つは……えへつ、えへへ」

小さな咳が零れる。彼女は、気でも狂つたかのようにえへらえへらと笑つていた。脳内に放たれた快樂物質が、彼女を幸せ漬けにしていたのだ。

「あらら、壊れちやつたかな？ 私のくせに根性ないねえ」

なんでもないことのように笑う。異様きわまる危険行為すら、遊びにすぎないのだ。

「さて、と。ねえ、堕ちちやつてるとこ悪いんだけど、足を汚した責任はとつてよ」

ぶらぶらと、諏訪子の眼前に、自身の種にまみれた足が差し出される。瞳は霧でもかかったかのようにぼんやりとしており、まともに焦点も結んでいない。見えているとは思えないような状態だったが、それでも彼女は舌を伸ばして応える。

「んれる、ぢゆう、くむ、ぷふ」

「くく、そうそう、それでいいんだって」

指の谷間、爪の間に至るまで、精虫の一匹すら残すまいとするかのように、丹念に舐めしやぶつていく。植え付けられた雌の意識がそうさせているのだ。

分霊はしばしその奉仕と、得られる優越感とを楽しんでいた。けれどもそれは長くは続かなかつた。足が離れていく。諏訪子はそれを目で追った。何故、という、餌を隠された犬のような色を、その視線は抱いていた。

「熱心な仕事だつたね。それは認めるけど、まさかそれだけで許されると思つた？ 私達は崇り神。粗相は、身をもつて償わせるものでしょ」

その瞳は、相手に畏れを抱かせ、有無をいわさず従わせるものだ。これが気の弱い人間であれば、畏怖のあまり心臓を止めてしまつていてもおかしくはない。神である彼女に対して、そこまでではないにせよ、強く作用した。

分霊にうながされ、仰向けになる。両脚を抱えられ、大きく股を広げさせられた。幾度もの絶頂でどろどろになった雌穴があらわになる。そこはひくついていた。

「くくく、おあつらえ向きに濡れてるじゃん。これならすぐにも挿れられるね—— 覚悟しなよ？ 私はあんたなんだ。あんたの感じるところも、弱い責め方も、壊し方だつて全部知つてる。気が狂うくらい犯して犯して犯し抜いて、そのだらしな雌穴、自分のちんちんの形から戻らないくらいにしてあげる。もちろん、最後にはたつぷり

膣内射精して、神の子を孕んでもらうからね？ 光榮に思いなよ？」

膣内射精。その言葉に、人形のようにだった彼女は反応を示した。彼女の中の雌性が。先ほど、精液まみれの手で肉穴をかき回しながら、こんなことをしていたら自分の子を孕んでしまうのではないか、などと考えた。けれどもあれば、いわば仮定法の中で話、まあ大丈夫だろうという前提の上での空想だ。煙草を吸うと体を壊すと云いつつ、それでも吸う輩のようなものだ。

だが、これは違う。煙草の喩えを使い続けるなら、それを貪り食うようなものだ。ぐちやぐちやと肉畑を掻き回され、悦び、悦ばした後の、征服の証としての種付けを受けるということは、私はあなたの所有物です、あなたの種で孕ませていただきますという積極的意思表示にほかならない。

「なアに今さらためらつてんの？ それが目的で分靈わたしなんて作つたくせにさア」とびきり意地の悪い顔を浮かべ、彼女は笑う。

分靈というものは、クローンとも、あるいは影分身とも違う。分靈としての諏訪子は独立した自我を持つ一方で、紛れもない洩矢諏訪子であり、記憶を共有している。つまり彼女は、諏訪子がどういう考えのもと分靈を産んだか、全て把握している。

「自分と生でたつぷりセックスして、後のことなんて考えずに好きだけ射精された



ちんちんだつ、ブチ込まれて無様にイツちゃえ、この淫乱ツ！」

「あつ——はああああツ！」

どぢゅんツ！ と、泥沼に杭を打ち込むような音とともに、彼女のペニスが、彼女自身へ叩きつけられた。灼けた鉄の棒をねじ込まれるような甚だしい衝撃に、諏訪子は背をのけぞらせて嬌声を撒き散らす。ぴいんと、両脚は爪先に至るまで伸ばされる。「ツ……は、あ、すつご。私のおまんこつ、ものすつごく締め付けてきて、褻が絡みついてきて、はあ、ああ、油断してたらすぐ射精ちやいそうツ……」

一方で分霊も、自分の肉穴の具合に表情を蕩けさせていた。腰をぞぞぞ、と震わせ、はああ、と感極まったような溜息を零した。

分霊はしばらくの間、動かずに止まっていた。すぐに射精ちやいそうという言葉は、あながち誇張でもなかったのだろう。二、三度深く呼吸し、息を整えると、ゆつくり、浅く抉るようにして腰をしゃくり上げはじめる。

「くツ、あは、んつ、うア、はあん……ツ」

「は、んんう……あれ、またちんちん勃ててんの？ あんだけ射精したのに？ へえ、やらしいことしか頭のなかにないわけ？ ハツ、それってまるで、猿以下じゃん」

幾度も射精したにも関わらず、彼女のペニスは、体内を巡る性感によって強制的に

膨らまされていた。分霊はそれを浅ましいことだと嘲い、蔑みの視線を送る。

くいくいくいと、ストロークは小刻みに、陰茎の根本の裏側を擦るように行われる。普通ならあり得ない場所からの刺激に、肉棒は惨めにもびくんびくんと脈動する。

「はあ、あッ、ひい、おちんちん、おちんちん気持ちいいーッ」

快楽中毒となった脳は腕へ指示を送り、みつともなくそそり立つソレへ向かわせる。しかし、途中で止められた。分霊が腕をしつかりと掴んでいた。その瞬間の諏訪子の瞳が語ったことを言葉にするなら、何故、だ。わかかってないねえ、と彼女は言う。

「せっかくのセックスなのに一人でちんちん扱こうとするなんて。沢遊びに来たのにビニールプールで遊んでるようなものじゃん。やめてよね、興奮めだから」

やれやれ、というように、分霊は肩をすくめてみせた。しかし、そうは言っても、我慢がきかない。種を射精したい、射精したいという一物からの要求が、次から次へ脳へ叩きつけられていた。早いところ満足させてやらねば、パンクしてしまいうだ。「あーあーあー、本格的にお脳が駄目になっちゃってるんだねえ。……しようがない、射精させたげるよ。……ただし、もう二度と勃起なんてできなくなるくらい思い切り、身体水分全部吐き出すくらい勢いで出してもらおうけどねッ！」

「はッ、あはああッ、ひいひいひいッ！」



言つて、彼女はその手で、哀れに脈打つモノを、官能の溜息をこぼす暇すら与えず、扱き上げてきた。がしがしがしと、手の動きはひどく激しく乱暴で、相手を壊すために行われているかのようだ。走る電気刺激エックスタジーに跳ねる腰を、分霊は強引に抑えた。

「へえア、待つ、いつあ、は、待つて、おちんちん激し、は、うあああツ」

「待つて？ 何言つてんの？ そっちがどうしてもイキたいって言うから、イかせてあげようとしてるんじゃないか。それを待つてつのは、筋が通らないんじゃない？」

「そツ、んな、はあ、ウア、くウウウツ」

がくんがくと、身体が跳ねる。目の裏で、桃色の閃光がばちちツと弾けていく。与えられる官能はあまりにも大きく、対する彼女の肉体は、あまりにも小さい。

「我儘だなあ本当に。我儘つてのはいけないことだよ。いけないことをする奴には、バチが当たるもんだ。そら、思いつきりバチを当ててやろうかア！」

「ひイイアああツ！」

男根を扱き上げながら、分霊はピストンを再開する。今度は先ほどのような、軽い快感をジャブのように浴びせる動きではない。入口から奥の奥までを一撃で刺し貫く、ジヨルトのようなストロークだ。しかもそれが、何度も何度も叩きつけられるのだ。

陰陽二重の快樂が、再び訪れる。その前では諏訪子は、嵐にさらされた木の葉――

いや、それよりもさらにちつぽけなものだった。

「ひッ、アアッ！ あうア、ほっ、ひい、えあ、はアアッ！」

「はは、そらッ、そらッ、そらそらそらそらそらアアアアッ」

彼女が官能に振り回される一方で、分霊もまた、自分を責める優越と倒錯、そして股座のものから伝わる快樂とに狂っていた。可愛げな表情をサデイスティックに歪めながら、腰をむちやくちやに叩きつけ、腕をがすがすと上下させている。

諏訪子は、悦びにもみくちやにされながらも、その様を見、そして思う。

——足りていない。

分霊が得ているのは男の悦びだけだ。女を犯し狂わせる悦び、ペニスの悦びだけだ。自分が男女両方の快樂を得ているのに、それはあまりにも不公平というものだろう。

神は自らに尽くすものに恵みを、背くものに祟りを与える。彼女は自分を悦ばせた。それはつまり官能を供物として捧げたのと同じだ。なら、たとえ神であろうと恵みを受ける権利はある——授けなくては。とびきりの恵みを。

「さアほらもつと声だしてヨガリなよッ——あれ、えっ、ちよ」

腰をかき抱き、尻の側から手を回す。なんの悦びも得ていない膣口に指を伸ばす。彼女は小さく身を引いたが、ぐつと抱き寄せる。神の恵みを辞退するなど、できない

相談だ。神とは森羅万象に他ならない。山や海、空に世話にならずして生きていけるものなど、世界広しといえどもあろうはずがないのだ。

「待つて待つて、そういうのいらなから——あ、はッ！ ああ！ くひ、イあ！」  
小さなその入口に指を差し入れ、掻き回していく。自分の肉体であるから、どこをどう弄ればどのような快感があるのかも熟知している。そこを、的確に責めていく。そのたび彼女は女の声を上げ、背を震わせる。陰陽は満たされているようだ。

「こ、んのッ、そんなら私だつて、やらせてもらうから」  
「はっ、ああはア！」

男根への責めと抽送とが再開された。下半身を吹き飛ばしどろどろのポタージュに漬け込むような快感に、諏訪子は裏返った嬌声をあげる。しかし、指の動きを止めはしない。神の恵みを受けてなお傲慢にならず、殊勝にもさらに尽くそうというのだ。そういう者にこそ寵愛をくれてやるのが、神としての勤めというものだろう。

「はッ、あアん、ッひ、くううん！ おッ、ああうッ」

「ううあ、くい、アうあ、おちんぼ、おまんこ、すごつ」

互いが互いに譲らず、競いあうようにして性の悦びを与えていく。ぐちゅ、ずぶ、ぬぶ、ぱんッ、ぱんッ、ぬぼ、ぬぢゅ、と、あらゆる水音と嬌声とが混ざり合つて、

一種の音楽を奏でる。この世ならざるほどに淫らで卑猥な音楽を。その音色の美しさときたら、天界の雅楽であろうとも勝ることはあるまい。

——交響曲にフィナーレが必ず存在するように、何事にも終わりというものがある。当然、この二つの陰陽を重ねあわせた性の宴にもだ。

「あツ、はあ、ひ、おツ、アアツ、イクッ、イクイクイクイク」

「ひッ、あ、登ってくる、おちんほおまんこッ、種付けしながらおまんこイクウツ」  
相手を悦ばし、自らも悦び、そしてまた悦ばしというループは、その実、有限だ。

終わりは、二人同時にやってくる。二人共にむちやくちやな言葉を喚き散らしながら、ラストスパートにかかる。そしてとうとう、その瞬間は訪れた。

「あツ、ああツ、くる、種付けされて孕むううああアアアアアア——ッ！」

「ひイ、でる、でちやう、おまんこイキながら自分に種付け、んんアああ——ッ！」  
彼女らは同一の存在、同じ洩矢諏訪子だ。同じ肉体、同じ精神をもち、刺激に対してられる性感、快樂に対するキャパシティも同じだ。

ゆえに、オーガズムの瞬間も同時だった。膣内がきゆうう、と収縮し、それぞれが唾え込んだ指・ペニスを、まるでそれが千年来の恋人であるかのように抱きしめる。雄棒は奥の奥に溜め込まれていた欲望を、ぼびゆる、どびゆると放ち始める。

諏訪子の体内が白く染め上げられていく。自分の種、自分の遺伝子によって。女を孕ませるためにある、雄の欲望の滾りによって。己自身に種付けされている——普通ならば物理的にも道徳的にもあり得ない瞬間が、とうとう現実のものとなったのだ。

「へっ、ひ、あああ、ほッ、おおおおおア」

白濁が子宮口を貫き、さらに奥へと流し込まれていく。穢らわしい欲望が、人体で最も神聖な室をぐちやぐちやにしていくのが分かる。諏訪子はそのことに、怒りでも悲しみでも嫌悪でもなく、至福を覚えていた。深い肉の幸福を。膣肉はペニスを搾るように収縮し、種を全て吐き出させようとしていた。

一方で、諏訪子の雄茎も、汚汗を放っていた。至近距離からシヨットガンのように放たれたそれは、べちやちやちやと、分霊、そして彼女自身の身体をも汚していく。何度も射精しているというのに、全く薄まっていない。それどころか、むしろ濃度を増しているようですらあった。性の昂ぶりによって、肉体が、消費するよりも激しく子種を作り出しているのだ。

「あーッ、ひッ、いッ、おア、ほおおおッ」

今まさにびゅぐびゅぐと脈動しているそれを、分霊は無我夢中で扱く。射精によりひどく敏感になっているモノを無茶苦茶に刺激され、聞き苦しい喘ぎ声をあげる。

諏訪子もされてばかりではない。分霊の雌穴に潜らせた三本の指を、独立した別の生物のように操り、襲の裏側を暴き立てる。分霊はがくがくと腰を痙攣させる。

永久機関——科学者がこの狂宴を見たなら、勃起すると同時に、それを思い起こすだろう。与えられた快楽をもとに快楽を与え、それだけ快楽を与えられ、という連鎖は、まさにその幻想機械を思い起こさせるものだった。

「はあ、んッ、ああ、はあ、お、あは……」

けれども、永久に続くように見えるそれにも、終わりはある。体力の限界という、なんとも無粋な終わり方が。分霊はさきほどまで緊張させていた肉体を今度は反対に弛緩させ、諏訪子の上に倒れこむ。いきおい、散々種を植えたモノが膺から引き抜かれる。雌肉は別れを惜しむように雄に吸い付き、亀頭が這い出る瞬間には、別れのキスのようにちゅぽつ、と小気味良い音をたてた。女鳴かせの剛棒といった風情のモノは、溜め込んだものを全て吐き出したためか、今や半勃ちほどの状態だ。

二人とも、しばらくそのまま動かなかった。というより動けなかった。指の一本を動かすことすら、この上なく大儀に思われた。

「はあ、くひ、ふう……」

「はあ、あ、あはあ……」

どちらも潰れた蛙のように横たわって、ただ肩や胸を上下させるばかりだ。荒く、しかし絶頂の余韻を含んだ満足気な呼吸だけが、蔵の中に響いていた。

「んツ、ふ」

分霊の乗った位置が悪く、諏訪子は若干の息苦しさを覚えた。小さく身じろぎすると、密着し合った肌が擦れあう——ぬるり、と、生暖かなものを感じた。汗ではない。うんざりするほどぶちまけた、自身の精だ。

すると、どちらともなく、ゆっくりと身体を擦り合わせはじめた。ぬる、ぬろお、と、べとつく感触が互いの肌の間で塗り広げられていく。平らな乳や萎えかけた陰茎が時折触れ合い、甘やかな官能をもたらず。

「あ、ん、はア」

「くひつ、はあん」

二人とも、呼吸が次第に甘い溜息に変わりつつあった。あれほど射精し、しばらくは勃起そうもなかったモノは、あろうことか再び硬さを取り戻していた。

視線を交わす。そこに込められていたのは、燃え上がるような欲望だった。

今日は早苗も神奈子も出かけている。性の宴は、まだまだ終わりそうもない。